秋田県文化財調査報告書第138集

石名館遺跡第2次発掘調査報告書

—仙北平野農業水利事業上総川排水路工事に係る埋蔵文化財発掘調査—

1986・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

秋田県文化財調査報告書第138集

石名館遺跡第2次発掘調査報告書

—仙北平野農業水利事業上総川排水路工事に係る埋蔵文化財発掘調査—

1986・3

秋田県教育委員会

序

仙北平野は、穀倉地帯で知られるとともに先人の残した数多くの遺跡が所在しております。農林水産省東北農政局では農業用水の有効利用をはかるため、仙北平野農業水利事業を計画し、用水施設の改修整備を施工してまいりました。

六郷町と仙南村にまたがる上総川幹線排水路の工事区域内には、縄文時代晩期の石名館遺跡が存在することが判明したため、秋田県教育委員会では工事に先立ち昭和58年度に第１次発掘調査を行い、引き続き本年度第２次発掘調査を実施いたしました。

このたびの調査では、昭和58年度の調査と同様に多くの土器、石器が出土し、ほかに土壙や土器埋設遺構なども検出されました。

本報告書はこの調査成果を収録したものであり、今後の郷土の歴史研究と文化財保護に広く活用されることを望むものであります。

最後に、この調査に御協力をいただきました東北農政局仙北平野水利事業所、六郷町教育委員会、仙南村教育委員会をはじめ、関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和61年３月31日

秋田県教育委員会

教育長　斎藤　長

例　　言

1．本書は、秋田県教育委員会が昭和60年10月24日～11月７日と昭和61年１月20日～２月４日の二回にわたって実施した秋田県仙北郡仙南村に所在する石名館遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書の第１章、第２章、第４章第１節1(1)、2、第５章を栗沢光男、第３章を柴田陽一郎、第４章第１節1(2)を小林克が執筆した。

3．遺構実測図における土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』に拠った。

4．本書に使用した地図は国土地理院発行の５万分の１、東北農政局仙北平野農業水利事業所調製５百分の１地形図である。

5．検出された遺構のうち、柱穴様ピットには一連の番号を付したが、他の遺構にはその性格に関係なく通し番号を付した。また遺構・遺物には下記の略記号を使用した。

ＳＲ　土器埋設遺構　　ＳＫ　土壙　　ＲＰ　一括出土土器

6．今回の調査にあたり、高橋喜則氏、高橋光宅氏から、昭和初期に採集した遺物の提供を受けた。記して感謝の意を表したい。

目　　次

序
例　言
第１章　はじめに……1
　第１節　発掘調査に至るまで……1
　第２節　調査の組織と構成……1
第２章　遺跡の立地と環境……3
　第１節　立地と環境……3
　第２節　歴史的環境……3
第３章　発掘調査の概要……5
　第１節　遺跡の概観……5
　第２節　調査の方法……6
　第３節　調査の経過……6
第４章　調査の記録……9
　第１節　検出遺構と遺物……9
　　１　縄文時代の遺構と遺物……9
　　２　平安時代の遺物……50
第５章　まとめ……51

図　版　目　次

第１図版　調査区遠景　調査近景……53
第２図版　秋期発掘調査状況……54
第３図版　冬期発掘調査状況……55
第４図版　ＳＫ01　ＳＫ02　ＳＫ03・05・06……56
第５図版　ＳＫ07　ＳＫ11・ＳＸ10　ＳＫ12・13……57
第６図版　ＳＫ16・17　ＳＫ20　ＳＫ14・15……58
第７図版　出土土器（１）……59
第８図版　出土土器（２）……60
第９図版　出土石器（１）……61
第10図版　出土石器（２）……62
第11図版　出土石器（３）……63

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図 2
第２図　昭和初期に採集された石名館遺跡出土遺物 4
第３図　地形及びグリッド配置図 7
第４図　遺構配置図・土層柱状図 11・12
第５図　ＳＫ01・02・03・05・06・07・09・20土壙 13
第６図　ＳＫ11・14・15・18土壙、ＳＸ10 15
第７図　ＳＫ12・13・16・17・19土壙 15
第８図　ＳＲ04・08土器埋設遺構 16
第９図　遺構内出土土器（１） 31
第10図　遺構内出土土器（２） 32
第11図　遺構内出土土器（３） 33
第12図　ＳＲ04・08埋設土器 34
第13図　遺構内出土石器（１） 35
第14図　遺構内出土石器（２） 36
第15図　遺構外出土土器（１） 37
第16図　遺構外出土土器（２） 38
第17図　遺構外出土土器（３） 39
第18図　遺構外出土土器（４） 40
第19図　遺構外出土土器（５） 41
第20図　遺構外出土石器（１） 42
第21図　遺構外出土石器（２） 43
第22図　遺構外出土石器（３） 44
第23図　遺構外出土石器（４） 45
第24図　遺構外出土石器（５） 46
第25図　遺構外出土石器（６） 47
第26図　遺構外出土石器（７） 48
第27図　遺構外出土遺物 50

表 目 次

第１表　遺構内出土石器観察表 36
第２表　遺構外出土石器観察表 49

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

東北農政局仙北平野農業水利事業所では、農業用水の安定的な確保、供給を図るため、昭和49年度から玉川に玉川頭首工、丸子川に丸子川頭首工を新設し、これから大曲市・角館町・六郷町・中仙町・仙北町・太田町・千畑町・仙南村の各市町村へ導水するための幹線用水路と幹線排水路の改修整備を行い、冠水被害を解消しほ場の乾田化のための事業を行ってきた。

昭和58年度には、この事業の一つである仙北郡六郷町と同仙南村を流れる上総川排水路工事に着工したが、同工事区域内に周知の遺跡である石名館遺跡の一部が存在することが判明した。このため東北農政局仙北平野農業水利事業所と秋田県教育委員会が協議の上、上総川排水路工事の設計変更等は不可能であることから、昭和58年度に第１次発掘調査を行い、本年度第２次発掘調査を実施することとしたのである。

なお本調査は、調査区域内にある鉄工所の移転の都合で、昭和60年10月24日から11月７日までの秋期調査と翌昭和61年１月20日から２月４日までの冬期調査の２回にわたって実施した。

第２節　調査の組織と構成

遺　跡　名　石名館遺跡

遺跡所在地　秋田県仙北郡仙南村南町字石名館57番地８号他

調査期間　昭和60年10月24日～11月７日（秋期調査）
昭和61年１月20日～２月４日（冬期調査）

調査予定面積　360㎡（秋期調査234㎡、冬期調査126㎡）

調査面積　272㎡（秋期調査141㎡、冬期調査131㎡）

調査主体者　秋田県教育委員会

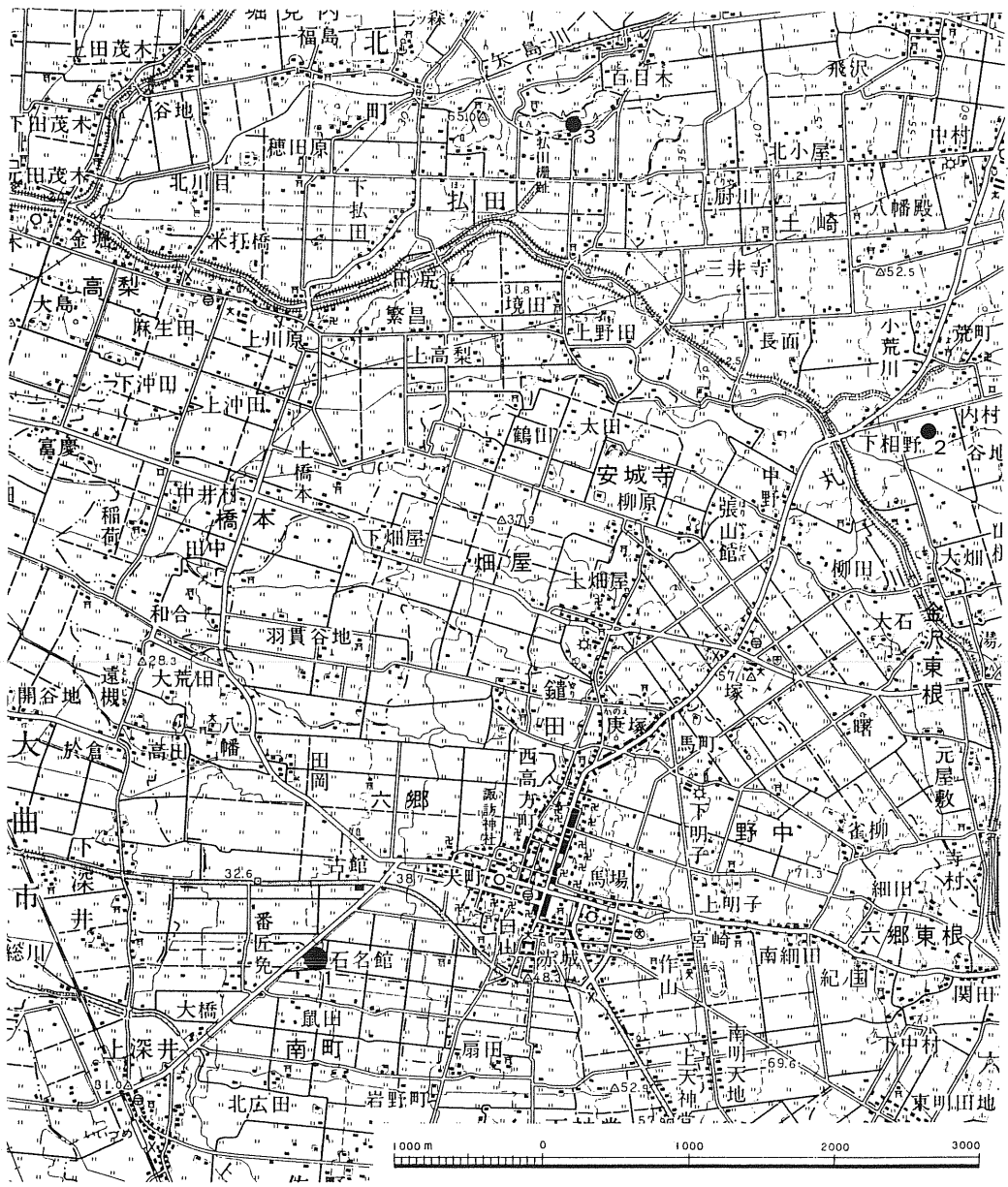
調査担当者　柴田陽一郎・栗沢光男（秋田県埋蔵文化財センター　文化財主事）

事務担当者　加藤　進（秋田県埋蔵文化財センター　主査）　佐藤　健（同　主事）

調査作業員　高橋喜則　高橋幸一　高橋敬七　伊藤金一郎　佐藤子之助　小畑福次郎　坂本新一郎　高橋シズエ　高橋ユキ　高橋シモ　高井ミヨ　伊藤好子　佐藤アイ子　照井タキエ

整理作業員　熊谷道宏　渡辺義美　斉藤美江子　進藤妗子　稲葉アイ　森川恵子　加藤美和子　倉田智恵子　高橋温子　大野節子　富樫久子　保坂光子　須田喜和子　池田リュウ子　伊藤美幸　高橋雅子　高橋いせ子　高橋美和子

調査協力機関　東北農政局仙北平野農業水利事業所　六郷町役場産業課　六郷町教育委員会　仙南村教育委員会　大和建設株式会社



（国土地理院五万分の一「六郷」使用）

第１図　遺跡位置図

1．石名館遺跡
2．内村遺跡
3．払田柵跡

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境

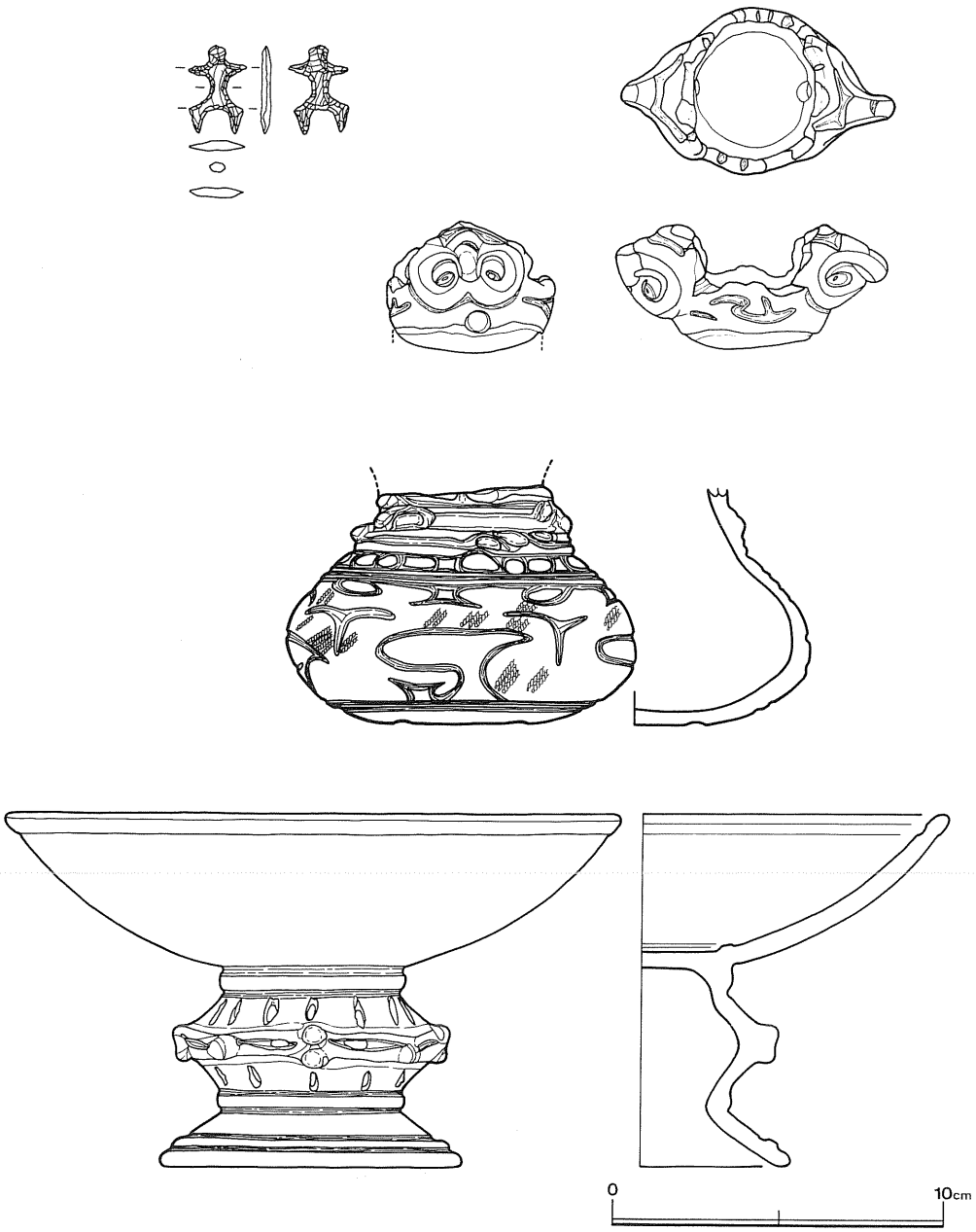
石名館遺跡は南北約60km、東西約15kmにおよぶ横手盆地の北東部、国鉄奥羽本線飯詰駅の北東約1.75kmに位置し、上総川に沿って東西に走る県道116号の南側に隣接しており、六郷町と仙南村の両町村にわたり所在している。遺跡の周囲は肥沃な水田地帯で、遙か東方には奥羽山脈が南北に連なっている。

横手盆地にはこの奥羽山脈を水源とする諸河川が扇状地をつくっており、北から千畑町本堂城回を中心とする千屋扇状地、六郷町を中心とする六郷扇状地、南の金沢を中心とする金沢扇状地と連なる複合扇状地を形成している。また盆地北部の仙北町には真山・長森、南部の仙南村には大森・飯詰などを中心とした残丘がある。

遺跡は六郷扇状地先端部に立地している。現況はそのほとんどが水田となっているが、一部は農道や宅地となっている。標高は35～36ｍである。

第２節　歴史的環境

石名館遺跡が立地する六郷・仙南二町村および千畑町は、前述したようにいくつかの扇状地が形成されているため、各所で清水が湧き出しており、中でも六郷町は古来百清水と言われてきた清水の里である。このため同町北側の千畑町や南側の仙南村などには多くの遺跡が存在している。旧石器時代の遺跡は確認されていないが、縄文時代の遺跡は各期を通じ多く、千畑町雲穣野、一丈木、内村(2)、松原、南外河原、六郷町鎧ヶ崎Ⅲ・Ⅳ、安楽寺、くさやじ、上四天地、四天森、仙南村蕨崎、小出、飯詰竪穴群などがある。弥生時代の遺跡は旧石器時代と同様に確認されていない。古代の遺跡としては、六郷町石森古墳、仙北町・千畑町の払田柵跡(3)、仙南村飯詰集落跡が存在する。中世に入ると城館跡がみられ、千畑町本堂城(平城)、元本堂城(山城)、六郷町古館などがあげられる。また六郷町古館は六郷氏の居城であったが、江戸初期の大名国替えによって、秋田の地に入部した佐竹義重氏の居城となった館である。



第２図　昭和初期に採集された石名館遺跡出土遺物

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

石名館遺跡は秋田県遺跡地図に記載のある県登録番号626番の周知の遺跡である。(註１) 小西宗吉氏の「羽後国石名館遺跡発掘の土偶土版等に就いて」(史前学雑誌第５巻第２号)(註２) における「明治28年頃より同35年頃に亘り田畑の耕作により自然出土せる縄紋土器数個石器10個出土せるも先住民族の遺跡として－下略－」の一文が遺跡確認の経緯と考えられる。石名館遺跡はこれと相前後し、高橋直一氏の「六、羽後石名館発見の石器時代遺物」（考古学雑誌23巻１号）(註３) や、武藤鉄城氏の「羽後国石名館出土の木製品」（史前学雑誌第３巻第４号）(註４) の一連の報文とその基になった昭和５年11月から昭和７年８月に亘った発掘によって、縄文時代晩期の優品を出土する遺跡として世に知られるに至った。近年は小西氏の報文に記載のある「青褐　泥炭層」の記述と埋蔵されていた植物性遺物と古環境研究の観点から、研究者間で注視されてきた遺跡である。

遺跡の規模は範囲確認調査を実施していないので明確ではないが、仙南村石名館集落の一部の宅地とその東側の水田、そしてその間を流れる用水路である。標高は約35ｍで、水田間の水路工事や、昭和58年度の発掘調査により出土した土師器・須恵器によって、縄文時代のみならず平安時代にも集落が営まれたことが解明されており、出土須恵器は螢光Ｘ線分析法により胎土分析・産地推定では、大曲市成沢窯跡から供給されたものが多いことが判明している。(註５) 成沢窯跡は９世紀中葉の年代が考定されている。(註６)

註１　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図』　1976（昭和51）年

註２　小西宗吉　「羽後国石名館発掘の土偶土版等に就いて」『史前学雑誌』第５巻第２号　1933（昭和８）年

註３　高橋直一　「六、羽後国石名館発見の石器時代遺物」『考古学雑誌』23巻１号　1933(昭和８)年

註４　武藤鉄城　「羽後国石名館出土の木製品」『史前学雑誌』第３巻第４号　1931（昭和６）年

註５　秋田県教育委員会　『石名館遺跡発掘調査報告書－仙北平野農業水利事業上総川排水路工事に係わる埋蔵文化財発掘調査－』秋田県文化財調査報告書第112集　1984（昭和59）年

註６　岩見誠夫・船木義勝「秋田県内の須恵器および須恵器窯の編年」『秋大史学32号』　1986（昭和60）年

第２節　調査の方法

本年度の石名館遺跡の発掘調査は、六郷町と仙南村飯詰を結ぶ県道の南側に隣接する上総川排水路の総延長173.23ｍ、幅7.00ｍのうち、第１次発掘調査が行われ、すでに同川排水路工事の終了区域を除く 360㎡である。本調査区には用水路、水田、農道、村道と移転の完了していない鉄工所及びその敷地があり、秋期調査は用水路、水田、農道、村道の部分を行い、残り鉄工所部分は冬期調査である。

排水路になる調査区はほぼ直線であることから、仙北平野農業水利事業所が打設してある工事用のセンター杭を利用し、第１次発掘調査と同様なグリッド方式で進めることにした。秋期調査では鉄工所の東側と西側にグリッドを設定するため、東側のセンター杭No.50＋ 23.00とNo.50＋ 38.50を結ぶ直線を基準線とし、この線上にグリッド杭13Ｇ、14Ｇ、15Ｇを求め、これと直交する線を設けて各グリッドを区割りし、西側ではNo.49＋ 69.00とNo.49＋ 90.00を結ぶ直線を基準線とし、この線上にグリッド杭11Ｇを求め、これと直交する線を設けて10Ｇと区割りした。冬期調査ではNo.49＋ 90.00とNo.50＋ 23.00を結ぶ直線を基準線とし、この線上にグリッド杭12Ｇを求め、これと直交する線を設けて11Ｇ、13Ｇと区割りした。

第３節　調査の経過

昭和60年度の石名館遺跡の発掘調査は、秋期と冬期の２時季で、その調査日数は延べ26日間である。発掘調査に先立つ10月16日（水）に仙北平野農業水利事業所と上総川排水路改修工事現場で工事計画、家屋移転予定をもとに発掘調査全般にわたる協議を行った。

秋期調査

10月24日（木）曇りのち雨　10時30分現場プレハブにて作業員に対する説明会を開く。その後調査区にグリッドを設定し、東側の水路部分から発掘調査に着手する。

25日（金）雨のち曇り　14Ｇ盛土整地下の第Ⅱ層から縄文時代後期の土器片多量に出土す。その下の第Ⅲ層黄褐色粘土上面で柱穴様ピットを数個検出。

29日（火）曇り　鉄工所敷地内の一部であるアスファルト床と現水路西側（旧道路）の盛土をバックホーで除去作業を行う。15Ｇで土壙検出、すぐに精査に入る。柱穴様ピットは15基認められる。

30日（水）雨時々曇り　幅１ｍの土層観察用トレンチを10Ｇと11Ｇの南壁下に東西にいれる。土器片が多量に出土す。

31日（木）曇りのち晴れ　14Ｇの現水路西側の掘り下げと精査を行う。溝を検出するも、

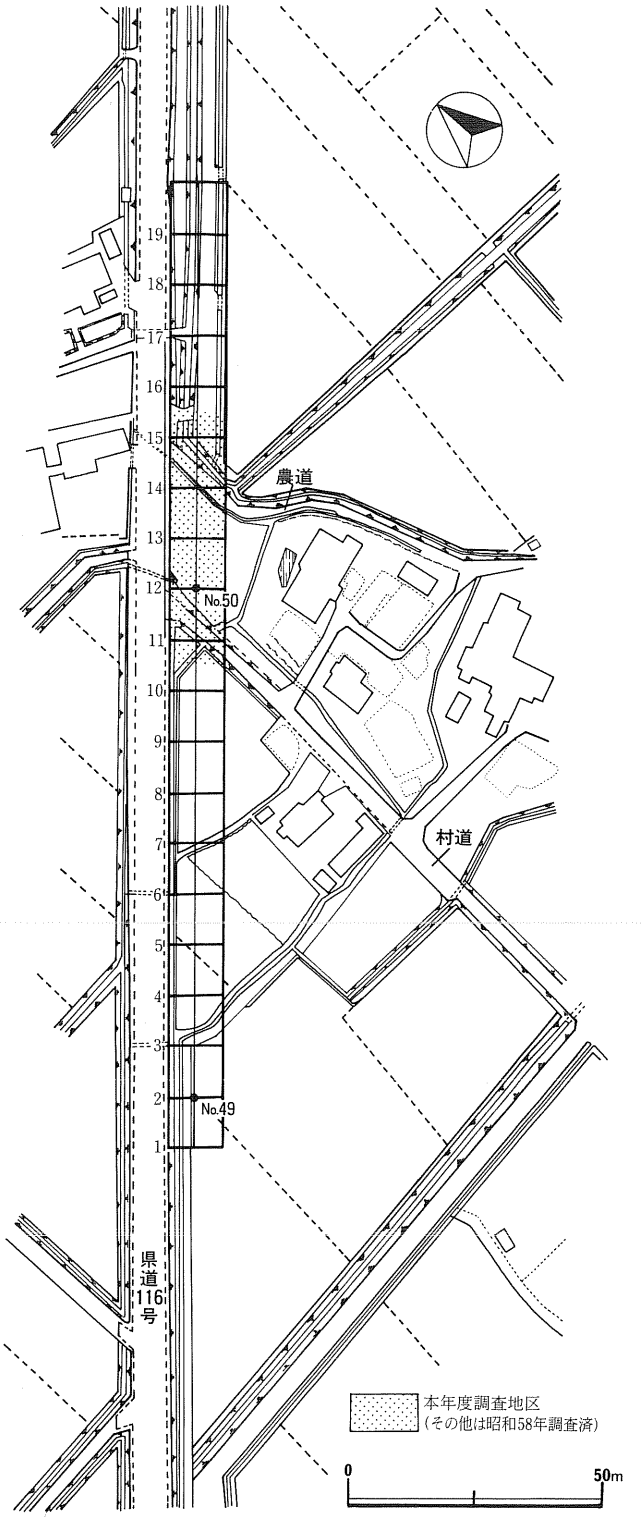
後に現代の排水路と判明す。

11月１日（金）雨　10Ｇ、11Ｇ、13Ｇ、14Ｇの掘り下げと精査を行う。磨製石斧と縄文時代の土器片多量に出土す。

２日（土）晴れ時々曇り　14Ｇ、15Ｇで検出された土壙と柱穴様ピットの平面図完成。14Ｇの現水路西側で土壙と土器埋設遺構を検出。土偶の足部出土。

５日（火）晴れ　昨晩から朝にかけての豪雨で、調査地冠水。排水作業を行う。14Ｇの現水路西側で新たに土壙、土器埋設遺構などを検出。

７日（木）曇り時々雨　降雨による溜水の排水と土器埋設遺構の土器の採り上げを行う。



第３図　地形及びグリッド配置図

午後には各遺構の実測等をすべて完了、発掘器材を埋文センターへ送り出し秋期の発掘調査を終了する。

冬期調査

１月20日（月）雪　厳寒のため調査区は白一色。発掘器材整理ののち11時から作業員設明会を行う。午後は大和建設のバックホーで鉄工所床のコンクリート、砂利土除去作業を行う。

21日（火）雪　上屋の中の13Ｇから発掘調査を開始す。土壙を検出、覆土から縄文土器片出土。作業燈や白熱灯だけの明かりでの発掘は暗くて不便。

22日（水）吹雪　夜間の寒気によって堆積土の表面が堅く凍結しており、ガスバーナーで融解。軟らかくなってから発掘を行う。土壙、ピットの精査。

23日（木）吹雪　ＢＭをテント内の13Ｇに移動。土壙、柱穴様ピット続々検出。朝はガスバーナーで表土を軟らかくしてからでなければ発掘は不可能。文化課冨樫泰時学芸主事来訪。

24日（金）吹雪　13Ｇの平面図を平板実測。今後の調査地12Ｇの除雪を行う。

25日（土）吹雪　12Ｇの東半分に上屋を架する。

27日（月）吹雪　12Ｇ東半分の掘り下げ。埋文センターへ遺物搬出。

30日（木）雪のち晴れ　土壙の精査と実測。

31日（金）晴れ　12Ｇの精査と13Ｇの掘り下げ、南側に土器片が集中埋蔵している。文化課桜井民雄参事、高橋英輔学芸主事来訪。

２月１日（土）曇り時々雪　昨日土器片の集中して出土した脇から石斧２個出土。

３日（月）曇り時々雪　遺物集中箇所の実測を行う。遺構実測図等の記録再点検。

４日（火）晴れ　発掘期間中久々の好天。発掘器材を整理し埋文センターに発送。冬期調査を終了し、２時季にわたって行った石名館遺跡の発掘調査を完了した。

第４章　調査の記録

第１節　検出遺構と遺物

本調査では、土壙17基、土器埋設遺構２基、柱穴様ピット26基、その他の遺構１基の46遺構が検出され、遺物は縄文時代の土器・石器、平安時代の須恵器・土師器などが出土した。以下これらの遺構・遺物について説明する。

１　縄文時代の遺構と遺物

（１）遺　　構

①土壙

ＳＫ01（第４・５図、第４図版）

15Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ02の南東に位置する。調査区外南側に入り込んでいるため平面形の全容は不明であるが、円形または楕円形となるものであろう。現存部から推定できる法量、方位は、長軸0.99ｍ、短軸0.53ｍ、深さ0.24ｍで、長軸方位はＮ－60°－Ｅである。底面はほぼ平坦であり、壁は内反し急傾斜で立ち上がっている。出土遺物は多量の土器片と石錐１点・石剣の破片（刃部片）１点である。

ＳＫ02（第４・５図、第４図版）

15Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ01の北西に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.34ｍ、短軸1.03ｍ、深さ0.21ｍで、長軸方位はＮ－73°－Ｅである。底面はほぼ平坦であり、壁は急傾斜で立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片である。

ＳＫ03（第４・５図、第４図版）

14Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ05の東に位置する。平面形はほぼ円形を呈し、長軸0.73ｍ、短軸0.59ｍ、深さ0.22ｍで、長軸方位はＮ－86°－Ｅである。底面は平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片である。

ＳＫ05（第４・５図、第４図版）

14Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ06の南に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.06ｍ、短軸0.56ｍ、深さ0.34ｍで、長軸方位はＮ－89°－Ｅである。底面は平坦であり、壁は急傾斜で立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片である。

ＳＫ06（第４・５図、第４図版）

14Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ03・05の北に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.35ｍ、短軸0.84ｍ、深さ0.11ｍで、長軸方位はＮ－37°－Ｅである。底面は西から東へ傾斜しており、壁は急傾斜で立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片である。

ＳＫ07（第４・５図、第５図版）

14Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ05の西に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸0.86ｍ、短軸0.80ｍ、深さ0.29ｍで、長軸方位はＮ－12°－Ｅである。底面はほぼ平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片と石錘１点である。

ＳＫ09（第４・５図）

14Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ07の南東に位置しＳＲ08に切られている。平面形はほぼ円形を呈し、長軸1.72ｍ、短軸1.56ｍ、深さ0.52ｍで、長軸方位はＮ－24°－Ｗである。底面は西から東へ傾斜しており、壁は垂直に近く立ち上がっている。出土遺物は多量の土器片と石剣の破片（刃部先端）１点である。

ＳＫ11（第４・６図、第５図版）

13Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ14・15の東に位置しＳＸ10を切っている。平面形は不整楕円形を呈し、長軸0.98ｍ、短軸0.45ｍ、深さ0.30ｍで、長軸方位はＮ－83°－Ｅである。底面は西側が高く東側が一段低くなっているが、両側とも平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片と石鏃１点である。

ＳＫ12（第４・７図、第５図版）

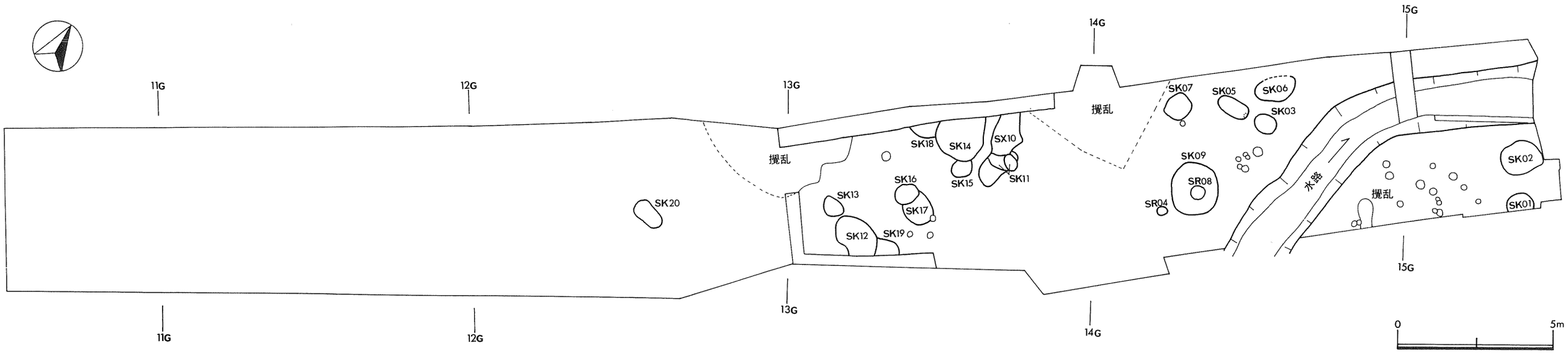
13Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ13の東に位置しＳＫ19を切っている。調査区外南側に入り込んでいるため平面形の全容は不明であるが、楕円形と思われる。長軸1.44ｍ、短軸0.97ｍ、深さ0.26ｍで、長軸方位はＮ－60°－Ｗである。底面はほぼ平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片と石鏃（先端部欠損）１点・石匙１点・凹石１点である。

ＳＫ13（第４・７図、第５図版）

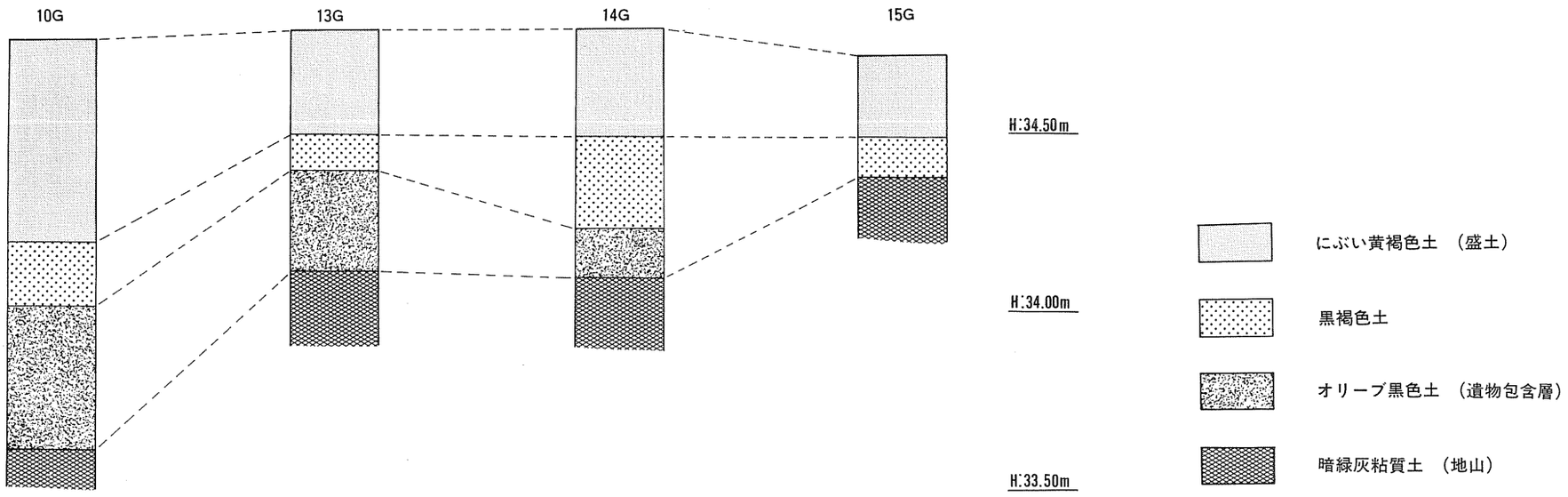
13Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ12の西に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.77ｍ、短軸0.60ｍ、深さ0.07ｍで、長軸方位はＮ－72°－Ｗである。底面は西から東へ傾斜しており、壁は急傾斜で立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片である。

ＳＫ14（第４・６図、第６図版）

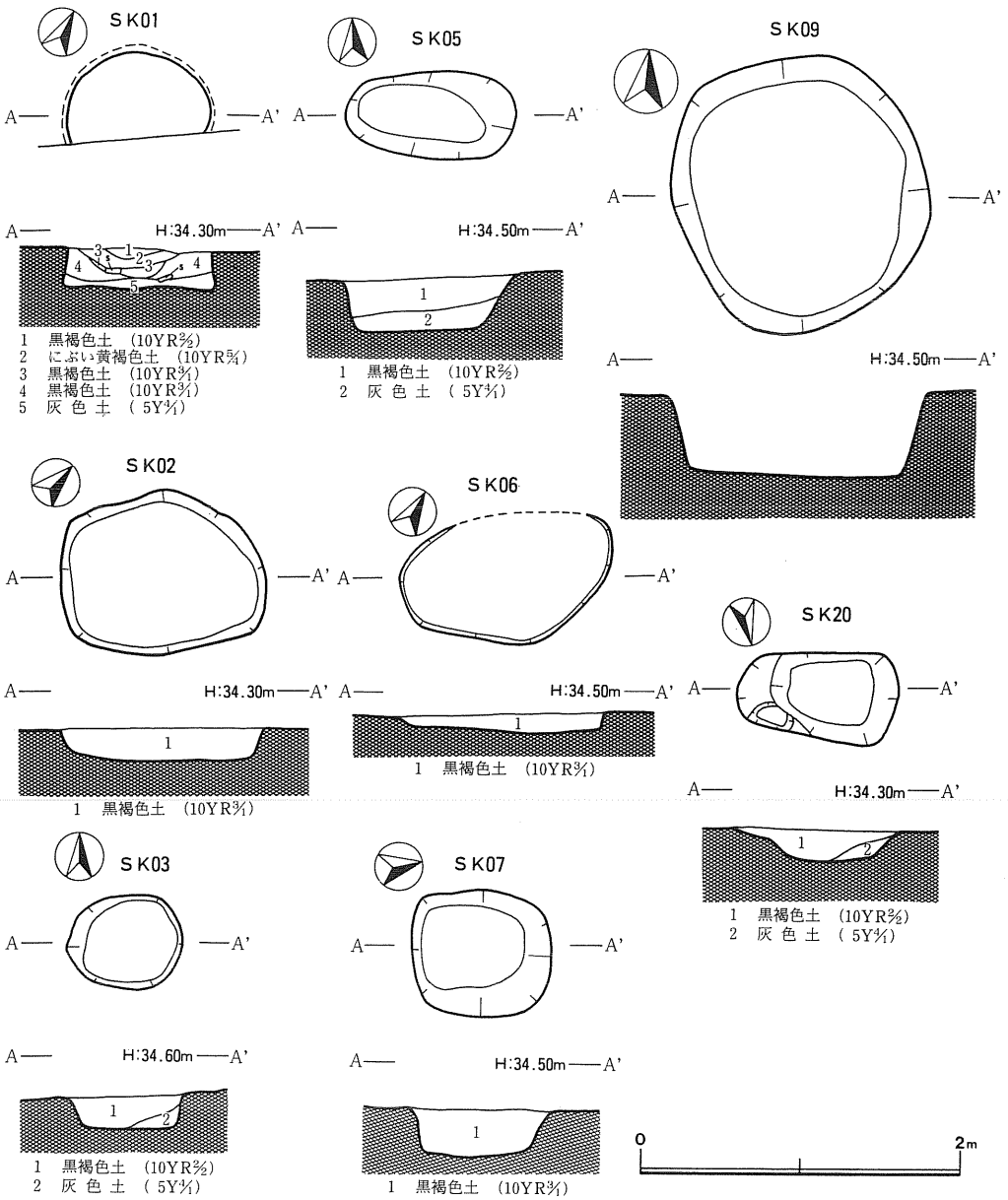
13Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ11・ＳＸ10の西に位置しＳＫ15・18を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸1.50ｍ、短軸1.40ｍ、深さ0.30ｍで、長軸方位はＮ－84°－Ｅである。底面はほぼ平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がっている。出土遺物は、北東隅の底面



SK　土壙
SR　土器埋設遺構
SX　その他の遺構



第４図　遺構配置図・土層柱状図



第５図　ＳＫ01・02・03・05・06・07・09・20土壙

からは、復原によりほぼ完形となった鉢形土器１個体分と少量の土器片が出土した。

ＳＫ15（第４・６図、第６図版）

13Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ11・ＳＸ10の西に位置しＳＫ14に切られている。平面形は楕円形を呈し、長軸0.75ｍ、短軸0.58ｍ、深さ0.22ｍで、長軸方位はＮ－５°－Ｗである。底面は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片である。

ＳＫ16（第４・７図）

13Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ12・19の北に位置しＳＫ17を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸0.76ｍ、短軸0.63ｍ、深さ0.20ｍで、長軸方位はＮ－25°－Ｅである。底面は東から西へ傾斜しており、壁は垂直に近く立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片である。

ＳＫ17（第４・７図）

13Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ12・19の北に位置しＳＫ16に切られている。平面形は楕円形を呈し、長軸1.20ｍ、短軸0.91ｍ、深さ0.20ｍで、長軸方位はＮ－67°－Ｗである。底面は丸みを帯び、壁は垂直に近く立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片である。

ＳＫ18（第４・６図）

13Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ16・17の北に位置しＳＫ14に切られている。調査区外北側に入り込んでいるため平面形の全容は不明であるが、楕円形と思われる。長軸1.00ｍ、短軸0.47ｍ、深さ0.10ｍで、長軸方位はＮ－53°－Ｅである。底面は平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片である。

ＳＫ19（第４・７図）

13Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ16・17の南に位置しＳＫ12に切られている。調査区外南側に入り込んでいるため平面形の全容は不明であるが、楕円形と思われる。長軸0.77ｍ、短軸0.50ｍ、深さ0.22ｍで、長軸方位はＮ－59°－Ｅである。底面はほぼ平坦であり、壁は垂直に近く立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片である。

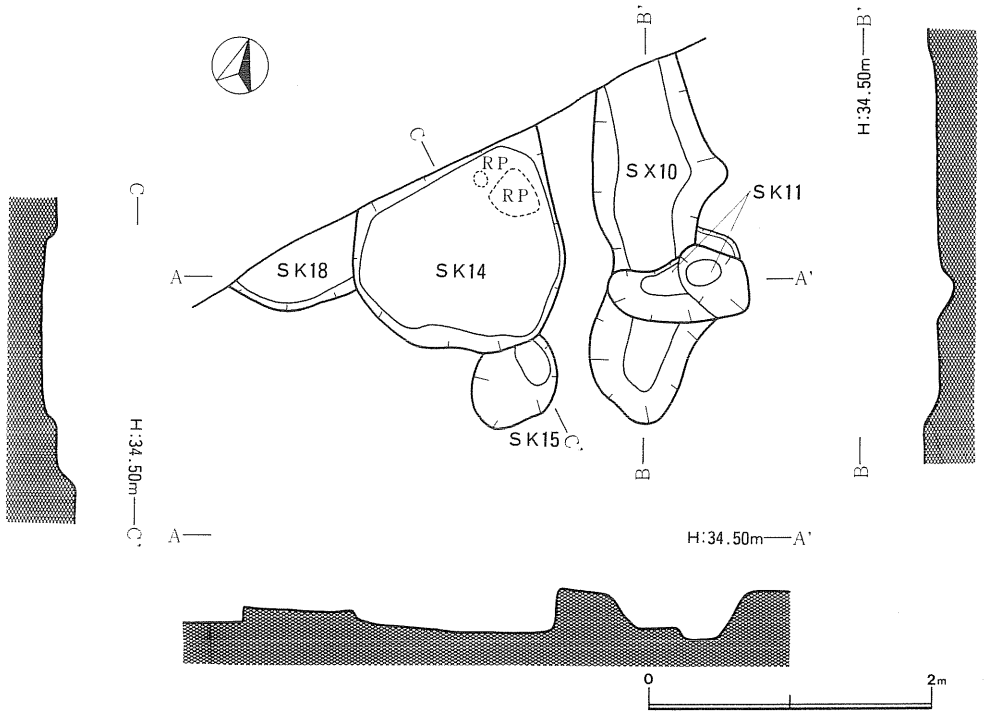
ＳＫ20（第４・５図）

12Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ12・13の西に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.00ｍ、短軸0.54ｍ、深さ0.18ｍで、長軸方位はＮ－70°－Ｗである。底面は丸底であり、壁は緩やかに立ち上がっている。出土遺物は土器片10点と円盤状土製品１点である。

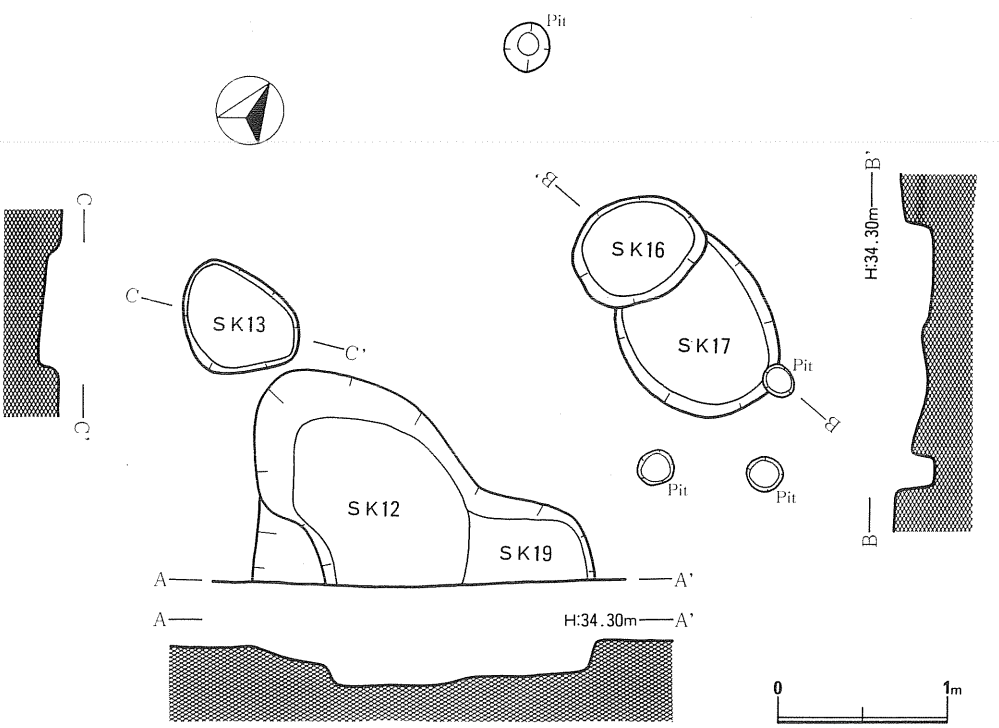
②土器埋設遺構

ＳＲ04（第４・８・12図２、第６図版）

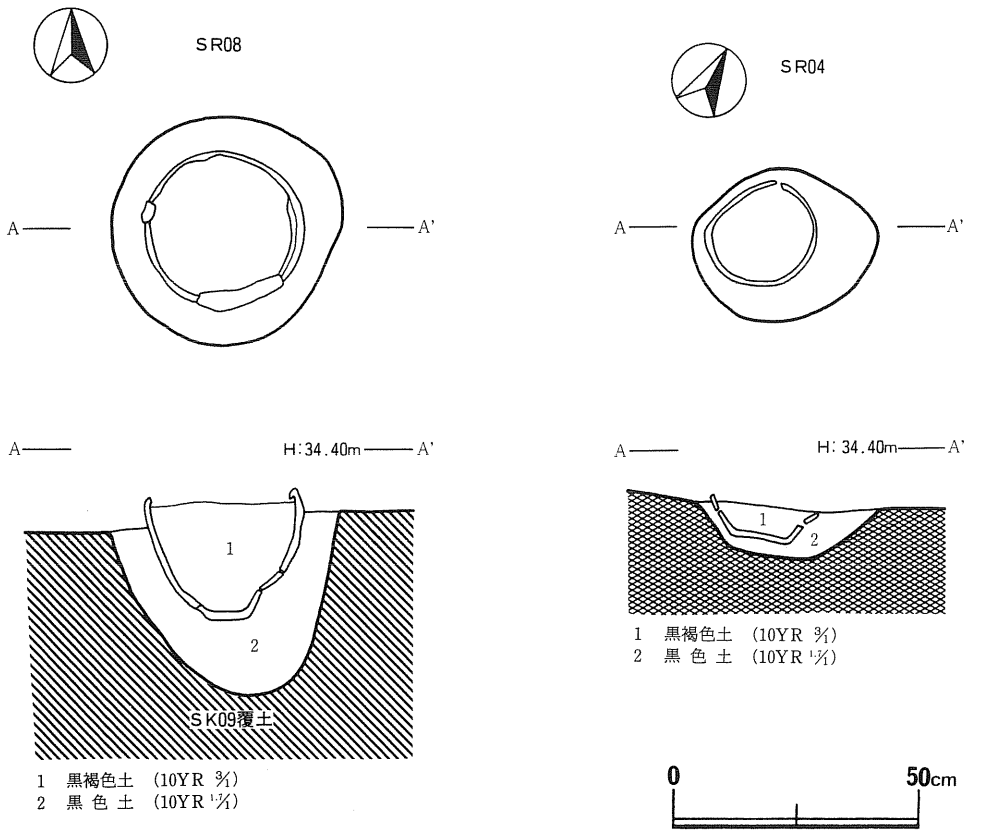
14Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＲ08・ＳＫ09の南に位置する。埋設穴は長軸0.38ｍ、



第６図　ＳＫ11・14・15・18土壙、ＳＸ10



第７図　ＳＫ12・13・16・17・19土壙



第８図　ＳＲ04・08土器埋設遺構

短軸0.31ｍ、深さ0.10ｍである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がっている。埋設穴底面から４㎝上方に土器を正位に埋設している。土器は深鉢形土器の体下半部～底部である。底径 100㎜、残存する高さ 176㎜を測る。器面には全面ＬＲ縄文が横位回転施文されている。胎土にはキメ細かな粘土が用いられているが、比較的多く砂粒を含む。

ＳＲ08（第４・８・12図１、第６図版）

14Ｇ内の地山面で検出されたＳＫ09のほぼ中央部を掘り込んで、土器が埋設されている。埋設穴は直径0.47ｍ、深さ0.37ｍである。底面は丸底で、壁は急傾斜で立ち上がっている。埋設穴底面から15㎝上方に土器を正位に埋設している。土器は口頸部の屈曲する深鉢形土器である。口縁部の９割程を、また体下半部を欠失している。復原される口径およそ 270㎜、器高 340㎜、底径88㎜を測る。口唇部にはＢ突起が付けられる。口縁部には無文帯が設けられ、頸部には１条の沈線がめぐる。体部は全面ＬＲ縄文が横位回転施文されているが、磨滅が著しく観察でき

る部分はごく一部である。胎土にはかなりの量の砂粒を含む。

③柱穴様ピット

Pit　1～9・15は、15Ｇ内の地山面で検出された。Pit　1：直径16cm・深さ11cm。出土遺物は若干の土器片である。Pit　2：直径18cm・深さ12cm。遺物は出土しなかった。Pit　3：直径22cm・深さ23cm。Pit　4に切られている。出土遺物は少量の土器片である。Pit　4：直径16cm・深さ10cm。Pit　3を切っている。出土遺物は若干の土器片である。Pit　5：直径16cm・深さ21cm。Pit　6を切っている。出土遺物は凹石１点である。Pit　6：直径13cm・深さ19cm。Pit　5に切られている。出土遺物は若干の土器片である。Pit　7：直径24cm・深さ29cm。出土遺物は少量の土器片である。Pit　8：直径26cm・深さ18cm。直径13cmの柱痕跡が確認できた。出土遺物は少量の土器片である。Pit　9：直径30cm・深さ30cm。出土遺物は少量の土器片と石錐１点である。Pit　15：直径20cm・深さ38cm。遺物は出土しなかった。

Pit　10～14・16～22は、14Ｇ内の地山面で検出された。Pit　10：直径20cm・深さ16cm。出土遺物は少量の土器片である。Pit　11：直径26cm・深さ12cm。出土遺物は少量の土器片である。Pit　12：直径24cm・深さ23cm。出土遺物は若干の土器片である。Pit　13：直径20cm・深さ12cm。出土遺物は少量の土器片である。Pit　14：直径14cm・深さ10cm。遺物は出土しなかった。Pit　16：直径30cm・深さ８cm。出土遺物は若干の土器片である。Pit　17：直径14cm・深さ17cm。Pit　18を切っている。出土遺物は少量の土器片である。Pit　18：直径18cm・深さ８cm。Pit　17に切られている。出土遺物は若干の土器片である。Pit　19：直径24cm・深さ21cm。Pit　20を切っている。出土遺物は少量の土器片である。Pit　20：直径16cm・深さ９cm。Pit19に切られている。遺物は出土しなかった。Pit　21：直径16cm・深さ５cm。遺物は出土しなかった。Pit　22：直径18cm・深さ38cm。遺物は出土しなかった。

Pit　23～26は、13Ｇ内の地山面で検出された。Pit　23：直径29cm・深さ９cm。遺物は出土しなかった。Pit　24：直径21cm・深さ21cm。ＳＫ17を切っている。出土遺物は若干の土器片である。Pit　25：直径22cm・深さ10cm。遺物は出土しなかった。Pit　26：直径20cm・深さ12cm。遺物は出土しなかった。

④その他の遺構

Ｓ×10（第４・６図、第５図版）

13Ｇ内の地山面で検出された遺構で、ＳＫ14・15の東に位置しＳＫ11に切られている。平面形は溝状を呈し、長軸2.50ｍ、短軸0.80ｍ、深さ0.13ｍで、長軸方位はＮ－19°－Ｗである。底面は凹凸しており、壁は緩やかに立ち上がっている。出土遺物は少量の土器片である。

（２）遺　　物

①遺構内出土土器

ＳＫ01（第９図１～４）

１は体部中半が算盤玉形に張り出す注口土器の破片である。張り出した部分の上面は沈線による文様が描かれ、その裏側の体下半部には截痕列が施されている。２～４は口縁部のやや内傾～直立する粗製の深鉢形土器の破片である。体部には全面ＬＲ縄文が横位回転施文されている。

ＳＫ02（第９図５・６）

５は口縁部が開き頸部で「く」の字形に屈曲する鉢形土器の破片である。口縁部は研磨されて無文化され、屈曲部を挟んで２条の平行沈線で区画した帯状の縄文帯がめぐっている。この縄文帯の下部にはさらに何帯かの縄文帯が施されると思われ、それらの縄文帯は各々の間に短かくひかれる短沈線によって連絡されている。６は大きく開く波状口縁をもった鉢形土器の破片である。口唇部は大きく肥厚し、口縁上端外面には大きな刻目列が施されている。

ＳＫ03（第９図７～９）

７、８はゆるやかに内傾する口縁部をもつ鉢形土器の破片である。７は口唇上に刻目が施され、口縁部文様帯には３段にわたって截痕列が施される。８の口唇上には小さなＢ突起列が並び、口縁部文様帯には２段の截痕列が施されている。体部に施される縄文は、７ではＬＲ、８ではＲＬ原体が横位回転施文されたものである。９は口縁部がわずかに外傾する粗製の深鉢形土器である。器面全面にＬＲ縄文が横位回転施文されている。

ＳＫ05（第９図10～17）

10は広口の壺形土器の肩部の破片である。肩の部分に設けられた文様帯に互いちがいに大きな截痕列が施されている。11もまた広口の壺形土器の口縁部～肩部にかけての破片である。口唇上にはＢ突起列が並び、口頸部の文様帯には３段の截痕列が施されている。肩の部分には２条の平行沈線がめぐり、体部には縄文が回転施文されている。12は口縁部～体部のゆるやかに曲線を描く浅鉢形の土器の破片である。口唇部には刻目が施され、口縁部の文様帯には截痕列が施されている。体部には磨消縄文の手法によって、雲形文が描かれている。地文にはＬＲ原体を横位回転施文した縄文を用いている。13はＡ突起の付けられた浅鉢形土器である。口唇上には突起上面をかけて沈線が１条ひかれている。また口縁直下の内外面に１条ずつの沈線がひかれるが、突起下で大きく三角形に抉り取られている。口縁部の文様帯には工字文が描かれている。14もＡ突起の付けられた広口の壺形土器の破片で、やはり口唇上には沈線がひかれている。口縁直下の内外面に１条ずつ沈線がひかれている。口縁部は無文となる。15は口縁上端が直立し、頸部で「く」の字形に屈曲する鉢形土器の破片である。口唇上にはＢ突起がつけられ、

内傾する口縁部は無文帯となる。頸部の屈曲部にはＢ突起を配したメガネ状の付帯文が施され、その下の体部には地文の縄文を施した上に横１条の沈線をひいた横位の楕円形文が描かれている。口縁内面にも沈線が１条めぐっている。16は口縁上端が短かく直立し、体上部が大きく膨らむ浅鉢形土器である。体上部の膨らんだ文様帯には、沈線と粘土粒の貼り付けによって変形工字文が描かれている。口縁内面には２条の平行沈線がめぐっている。17は口縁の内弯する鉢形土器である。口唇上には浅い刻目列が施文され、口縁直下には２条の平行沈線がめぐらされている。体部全面にはＲＬ原体が横位回転施文されている。

ＳＫ06（第９図18・19）

18は口縁部のやや外反する鉢形土器の破片である。口唇上にＢ突起が付けられていたものだが剥落している。口縁下には２条の平行沈線がめぐり、その下に設けられた文様帯中に沈線による文様が施されている。口縁内面にも１条の沈線がめぐっている。19は口縁の直立する粗製の深鉢土器である。器面全面にＬＲ縄文が横位回転施文されている。

ＳＫ07（第９図20）

20は口縁の直立する粗製の深鉢形土器である。器面にはＬＲとＲＬの両方の原体を横位回転させて羽状縄文を表出させている。

ＳＫ09（第９図21～32）

21は口縁部～体部にかけてわずかに膨らむ曲線を描く鉢形土器である。口唇上にはＢ突起が並び、口縁部の文様帯には入組三叉文が描かれる。文様帯の下限は３条の平行沈線で画されている。体部にはＬＲ縄文が横位回転施文されている。22～27は口縁部がわずかに内傾する鉢形土器である。口唇上には刻目列が施れ、口縁部の文様帯には羊歯状文（22～25）や截痕列(26・27）が施されている。羊歯状文には右傾し末端が噛み合うもの（22・23）と左傾するもの(24・25）の両者がある。体部には全面縄文が施されるが、22、24、25、27はＬＲ原体を、23はＲＬ原体を横位回転施文している。また26はＬＲ原体に結節部を設け綾絡文を表出している。28、29、30は体部のゆるやかに膨らむ浅鉢形土器である。28は口縁部に細かな截痕列をもち、体部には雲形文が磨消縄文手法によって描かれている。29は口唇上にＢ突起が作出され、口縁直下の２条の平行沈線のうち上段のものから突起にむけて列点文が施される。体部には雲形文が磨消縄文手法によって描かれている。30は口唇上にＡ突起がつけられ、この突起をかけて列点を配した１条の沈線がひかれる。口唇外面には口唇上の列点と交互になるように刻目が施されている。また口唇内面の側には細かな刻目列が施されている。口縁直下には２条の平行沈線が施され、体部には雲形文が磨消縄文手法によって描かれる。また内面は丹念に研磨されているが、体中半部の位置に縄文を施した隆線が１条施されている。28～30とも使用される縄文はＬＲ原体を横位回転施文したものである。31、32は口縁部のやや内傾する深鉢形土器である。口縁部

には31で３条、32で４条の平行沈線がひかれ、体部には結節部を設けたＬＲ原体が横位回転施文される。31では口唇上に１箇所Ｂ突起が付けられ、体部に補修孔が穿たれている。

ＳＫ11（第10図１・２）

１は口縁部が外反し、体部上半から下半までゆるやかな曲線を描いておりる浅鉢形土器の破片である。口縁部は無文である。口縁部と体部の境には刻目列が並び、体部には磨消縄文手法による文様が描かれる。区画内に充填される縄文はＲＬ原体を用い、区画に沿って回転方向を変えている。２は口頸部が直立し体部がやや丸みを帯びて膨らむ鉢形土器の破片である。口唇上には小さなＢ突起列が並び、口頸部の文様帯には２段にわたって截痕列が施されている。体部にはＬＲ縄文が横位回転施文されている。

ＳＫ12（第10図３～６）

３は口頸部が大きく屈曲する広口の壺形土器である。口唇上にはＢ突起列が並び、頸部の文様帯には右傾する羊歯状文が施されている。口縁内面にも沈線が１条めぐっている。４は口縁部～体部までゆるやかな曲線を描いておりる鉢形土器である。口唇上にはＢ突起が作出される。口頸部の文様帯には左傾する羊歯状文が施され、体部には結節部を設けたＬＲ原体が横位回転施文される。５は口縁部のわずかに内弯する粗製の深鉢形土器である。器面全面にＬＲ縄文が横位回転施文される。６は土器片を利用した円盤状土製品で、表面は磨滅が著しいが、ＲＬ縄文の回転施文された痕跡がわずかに残る。

ＳＫ14（第11図１～８）

１、２は口縁部がゆるやかに内傾する鉢形土器の破片である。口唇上には刻目が施され、口縁部文様帯には左傾する羊歯状文が施文される。体部はＬＲ縄文が横位回転施文されている。３はほぼ直立する口縁部をもつ鉢形土器の破片である。口縁直下に浅く２条の平行沈線をめぐらし、その間を浅い刻目列で満たしている。４～６は粗製の深鉢形土器の破片である。４、５は口縁部がほぼ直立し、６はゆるく屈曲して外反する。６の屈曲する口縁部は無文帯をなし、また口唇上に２つの刻みを入れている。また体部には補修孔が穿たれている。体部に施される縄文は４、５がＬＲ原体の横位回転施文、６はＲＬ原体の横位回転施文したものを用いている。また７はＬＲ原体に結節部を作り、その回転によって綾絡文が表出されている。８は口縁部がやや外反し、頸部でゆるく屈曲する鉢形土器である。口径 187㎜、器高 209㎜、底径74㎜を測る。体部の最大径は底部からの高さ 150㎜の部位にあり、 195㎜を測る。口縁～頸部の文様帯には５条の平行沈線がひかれ、２条目と３条目、４条目と５条目の間には先端の尖った工具によって、刺突列が施されている。また、口縁上端にも連続した押圧文が施される。さらに口縁部内面にも１条の沈線がめぐる。口縁部～頸部の文様帯では刺突文を施した後に、沈線を描画する施文順序となる。体部には全面ＬＲ縄文が横位回転施文されている。胎土には径１～３㎜

程の砂粒を含む。

ＳＫ15（第10図７）

７は口縁部がわずかに内弯する粗製の深鉢形土器である。器面全面にはＬＲ縄文が横位回転施文される。

ＳＫ16（第10図８～10）

８は平行沈線間に刺突列を施し、その下に沈線による文様を描く土器である。沈線は細く鋭い工具により施文され、施文後の調整はうけていない。９は地文にＬＲ縄文を施し、１条の沈線を体部にめぐらし、その上位に２重の円形文を連続して配置した土器である。円形文の施される文様帯中では磨消縄文の手法が用いられている。10は口縁部のやや内傾する粗製深鉢形土器である。器面には全面ＬＲ縄文が横位回転施文される。

ＳＫ18（第10図11～15）

11は口縁部の直立する鉢形土器の破片である。口縁に沿って２列に細い円形竹管文による刺突列が並ぶ。その下には、下限を沈線によって区画された縄文帯が施される。12は口縁部がわずかにゆるく内弯する鉢形土器の破片である。口唇上にはＢ突起が付けられ、口縁部の文様帯には大きな截痕列が施文されている。13は口縁部がゆるく内弯する鉢形土器の破片である。口唇上にはＢ突起列が並び、口縁部文様帯には左傾する羊歯状文が施される。体部にはＬＲ縄文が横位回転施文される。14は口縁部～体部までゆるやかな曲線を描く浅鉢形土器である。口縁上端には刺突列が並び、体部には雲形文が磨消縄文手法によって施されている。15は口縁のやや内弯する粗製深鉢形土器である。体部には全面ＲＬ縄文が横位回転施文されている。

ＳＫ19（第10図16）

16は注口土器の体中半部の破片である。張り出した部分上面に沈線による文様が描かれ、注口部の根本には隆帯がめぐらされている。

ＳＫ20（第10図17）

17は土器片を利用の円盤状土製品で、表面にはＬＲ縄文が施文されている。

ＳＸ10（第10図18～27）

18は刻目列を施した帯状区画の下に沈線による入組文が描かれる鉢形土器の破片である。19は口縁のやや内弯する鉢形土器の破片で、口唇上には刻目列が施され、口縁部文様帯に２段にわたって截痕列が施されている。截痕列は「Ｌ」字を沈線によって連続して描画することによって表出している。20は口縁部～体部までゆるやかな曲線を描く鉢形土器である。口唇上には刻目列が施され、口縁部文様帯には右傾する羊歯状文が描かれている。体部にはＬＲ縄文を横位回転施文している。21も20同様の器形をもつ鉢形土器の破片で、口縁部にはやはり右傾する羊歯状文が施されている。22は口縁部がやや内傾する鉢形土器の破片で、口縁部に３条の平行

沈線がめぐり、体部にはＬＲ縄文が横位回転施文されている。23も鉢形土器の破片で、口縁部は無文化され、体部にはＬＲとＲＬの原体によって羽状縄文が表出されている。24は口縁部がわずかに内弯し、体部がゆるく曲線的におりる鉢形土器である。地文としてＬＲ縄文が横位に施された後、口縁部に５条の平行沈線がめぐらされる。沈線上には１箇所粘土粒が貼り付けられ工字文が表出されている。25は体部が球形となる壺形土器の頸部から体部にかけての破片で、頸部と体部の屈曲部には３段にわたって截痕列が施文され、最上段の截痕列には縦位のＢ突起が１箇所貼り付けられる。２段目の截痕列はその下にある隆線部分と連結してＣ字状文を構成する。体部には渦巻様の文様が連結した構図が磨消縄文手法によって描かれている。地文の縄文はＬＲ原体を回転方向を変えて施文したものである。26、27は粗製深鉢形土器の破片である。体部には全面ＬＲ縄文が横位回転施文されている。

②遺構外出土土器

（第15図１～７）

１は口頸部が外側へむかって開き、体部にあっては肩の部分の張った偏平な球形を呈する壺形土器である。口径 113㎜、器高 165㎜、底径46㎜を測る。体部の最大径は底部からの高さ62㎜の部位にあり、 139㎜を測る。口縁部には幅38㎜で縄文帯が設けられ、下限は１条の沈線がめぐって画している。縄文帯内にはＬＲ縄文を規則的に横位、縦位に回転施文し、羽状縄文を効果させている。頸部は幅の広い無文帯となり、体部との境界で１条の沈線がめぐって部位を画す。体部には磨消縄文手法によって、流線形の構図が肩の部分に３単位、体下半部に３単位配置されている。地文としてＬＲ縄文が横位および縦位に回転施文されている。底部はわずかに上げ底ぎみとなる。胎土には 0.5㎜未満の砂粒が含まれる。焼成は良好である。２は球形の体部をもつ壺形土器である。口縁部～頸部および体部の１/２程を欠失している。復原される体部の最大径はおよそ 120㎜、高さ85㎜を測る。体部には沈線によって右側へ大きく膨らむ波状文が３単位描かれる。さらにその区画内部に回転方向を変えたＲＬ縄文が施される。胎土は比較的キメの細かい粘土が用いられている。３は５単位の波頂部をもつ鉢形土器の口縁部である。器形としては大きく口縁部の開くものである。残存する部分の計測値であるが、口径 120㎜、高さ55㎜を測る。器厚は口唇部にむかうにしたがい厚くなる。ことに波頂部分にあっては他の口唇部よりも２㎜程厚い。口縁上部には浅い刻目列が施文される。その直下に浅い沈線が１条口縁の波形に沿ってめぐらされる。その下は無文帯となる。胎土には砂粒がわずかに含まれる。４は口縁部～体部にかけてわずかに膨らみながらおりる鉢形土器である。体下半部および口縁部～体上部の２/３程は欠失している。復原される口径210㎜、残存する部位での高さ 145㎜を測る。口唇上には細かな刻目が施される。この刻目によってできあがった小突起は、口縁直下

に施される弧線によっておよそ２個単位ずつ括られる。また、これらの小突起のうち一部は他のものよりやや突出し、いわゆるＢ突起を形成する。復原される口唇上には、このＢ突起は７単位付くものと思われる。口頸部の文様帯には、上限を１条、下限を２条の平行沈線で画して、内部に羊歯状文と截痕列が施される。羊歯状文はその末端が噛み合わない左傾のものである。体部には全面縄文が施文される。その大半はＬＲ原体の横位回転施文によるが、一部にＲＬ原体を横位回転施文して羽状縄文を表出させている。口頸部文様帯を画する下限の沈線上に補修孔が１対穿たれている。胎土にはほとんど砂粒を含まない。精選した粘土を用いている。５は頸部で屈曲し、体部がゆるく膨らむ鉢形土器である。口縁部の１/４および体下半部を欠失している。復原される口径 128㎜、高さ 108㎜を測る。口唇上には刻目が施され、およそ63㎜の間隔でＢ突起が６単位つけられる。口縁部ではＢ突起間が弧線によって連結され、その内部は截痕列で満たされる。頸部の文様帯は上限を１条、下限を２条の平行沈線で画し、その中にクランク状の沈線を連続して描く。クランク状沈線の上下にはやはり截痕列が施される。この構図は左傾する羊歯状文と同様の文様表出効果をもつ。文様帯下限の沈線上には１箇所Ｂ突起が付けられる。体部は全面ＬＲ縄文を横位回転施文しているが、下半では磨滅が著しく縄文は観察されない。口縁部内面にも沈線が１条めぐらされる。胎土は精選されており、砂粒はほとんど含まれない。６は台付の浅鉢形土器である。浅鉢本体部分の約1/2、台部の１/４を欠失している。復原される口径 167㎜、器高88㎜、台部の底径82㎜を測る。口唇上にはおよそ45㎜間隔でＢ突起が11単位つけられる。またこのＢ突起から口縁上端外側にむかってのびる隆帯が、同じくＢ突起を形成する。この口縁上端のＢ突起は17単位である。ゆるく膨らむ体部には口縁部上端に２条、台部との境に２条の平行沈線をめぐらせて、雲形文による文様が施される。文様単位は３単位である。地文には細かなＬＲ縄文が横位回転施文されている。また口縁部内側にも刻目を施した隆帯がめぐる。外側へ反りながらおりる台部は、下端に２条の平行沈線がめぐる。台部に設けられる文様帯には、むかい合う弧線とそれからのびる肢線が組み合わされた三叉文を一つの文様単位として、４単位の文様が施される。胎土は精選した粘土を用い、砂粒はほとんど含んでいない。７は口縁部～底部にかけてゆるい弧を描く鉢形土器である。口径 158㎜、残存する高さ 125㎜を測る。口唇部には連続した刻目が施され、細かな波状を呈する。口縁部には幅12㎜で文様帯が設けられている。文様帯内には上下２条ずつの沈線にはさまれて、截痕列が施されている。体部にはＬＲとＲＬの撚りの細かい原体を用いて羽状縄文が施文されている。胎土はよく精選された粘土が用いられており、ほとんど砂粒は含まれていない。内面に煤状炭化物の付着が認められる。

（第16図１～４）

１は口縁上端がわずかに外側へ傾く鉢形土器である。口縁部～体部のおよそ１/２、および底

部を欠失している。復原される口径 159㎜、残存する高さ 130㎜を測る。口唇上には34㎜間隔でＢ突起が付けられる。各々の突起間は刻目でうめられる。口頸部の文様帯には２条の平行沈線間を截痕列でうめた文様が用いられる。体上半部の文様帯は上限および下限を２条ずつの平行沈線で画し、内部に彫刻的な磨消縄文手法を用いて雲形文を描いている。文様帯上限に雲形文が接する箇所に、１箇所縦位のＢ突起がつけられる。体下半部および文様帯内の地文には、ＬＲ原体の横位回転施文したものが用いられる。胎土には精選した粘土を用いている。２は浅鉢形土器の底部である。本来の器形は、口縁部から体部までゆるい曲線を描いて外反するものである。底部径 133㎜を測る。底面外周に沿って２重の平行沈線がめぐっている。胎土は精選した粘土を用いている。３は口縁部やや内弯する浅鉢形土器の破片で、口縁全周のおよそ１/３程度しか残っていない。復原される口径 225㎜を測る。口唇上には１対のＢ突起が付けられる。器面にはＬＲ縄文が横位回転施文される。胎土には砂粒を比較的多く含んでいる。４は無文の深鉢形土器の破片で、口縁部～体上半部のおよそ１/３程度しか残っていない。口縁上端はわずかに内傾する。器面全体は横位調整によって無文化されている。口縁部１箇所に補修孔が穿たれている。胎土には砂粒が含まれる。焼成は良好である。

（第17図１～41）

１は頸部にメガネ状の付帯文をめぐらせた広口の壺形土器の破片である。付帯文はメガネ状の構図の連結部でやや高くなっている。２、３は口縁部が大きく開く鉢形土器の破片である。口唇部は肥厚し、口縁上端には大きな刻目列が施される。刻目下は無文となるが、２では磨消縄文手法によって施文された文様の一部が観察される。４は壺形土器の破片で、頸部と体部の接合部分に２条、体上半部に３条の平行沈線が器面をめぐるように施文される。体上部の沈線上には30㎜程の間隔で粘土瘤が貼り付けられている。５～11は文様帯に刻目列を施す土器である。単に刻目列（もしくは刺突列）だけによって文様を構成するもの（６）と、沈線による文様と刻目列を組み合わせたもの（７・10）、沈線間に刻目列を充填させるもの（８・９・11）、刻目列と磨消縄文手法による縄文帯を組み合わせたもの（５）などがある。９では刻目列を施す以前に縦位の条線で沈線間を満たしている。沈線による構図は、５、10などで観察されるように入組文を描く。５では入組文の結節部に粘土瘤が貼り付けられている。口縁部の形状は、５、６、７のような平縁となるものや、11のようにＢ突起を付けるものなどがある。これらの土器は本来深鉢形土器の器形をとるものであるが、体部に屈曲部をもち文様帯が２段以上に分かれることが多い。12は口縁部に魚尾状の突起が付けられた土器である。地文としてＬＲとＲＬの原体を用いて羽状縄文を表出させた後、２条の平行沈線を口縁部下にめぐらせている。13はゆるい波状口縁をもつ土器である。波頂部から弧状の沈線を描き、その区画の中にＬＲ原体を充填施文している。14、15は口縁部文様帯に沈線による三叉文を描くもの。14では口縁部と体

部を３条の平行沈線で画している。15は口唇上にＢ突起が付けられ、Ｂ突起からも弧状の沈線がのびる。16は口頸部が内傾する注口土器の口縁部破片である。口頸部の文様帯は２段に分けられ、上段には左傾する羊歯状文、下段には縦に広がったＫ字文風の文様が描かれる。17～36は口縁部から体部までゆるやかな曲線を描いて内弯する鉢形土器である。口縁部の文様帯には、羊歯状文(17～19)、截痕列(20～29)、それらが簡略化された平行線（30～36）が施される。羊歯状文には、右傾して末端が噛み合うもの（17）と左傾するもの（18・19）がある。また截痕列には、その間隔の比較的狭いもの（20～26）と広いもの（27～29）とがある。いずれの土器も口唇外面に刻目列を施すが、20、28、29、31のようにＢ突起を作り出している。体部は全面縄文が施されるが、ＲＬ原体の横位回転施文するもの（17・26・31・35・36）と、ＬＲ原体の横位回転施文するもの（18～20・22～25・30・32～34）とがある。また21はＲＬとＬＲの両原体を横位回転施文させて羽状縄文を表出させた例である。37は広口の壺形土器の口縁部破片である。口唇上には１箇所Ａ突起が作り出される。頸部は研磨されて無文帯をなし、体部との屈曲部に截痕列が施される。38もまた壺形土器の破片であるが、無文化された頸部が長く、体部は偏平な球形を呈するものであろう。頸部と体部の境には截痕列が施され、その列上に１箇所縦位のＢ突起がつけられている。39は香炉形土器の体上半部の破片で、２箇所に設けられた透かし孔と体中半の屈曲部をめぐる刻目列を施した隆帯、およびその上に１箇所設けられたＢ突起が観察される。40、41は注口土器の破片である。40の注口部根元には粘土紐が二重に貼りめぐらされる。41は算盤玉形に張り出す体中半部の破片である。外側へむかって大きく張り出したＢ突起とその下にめぐらされる截痕列、および２条の平行沈線が観察される。

（第18図１～35）

１は口縁部～体部までゆるい曲線を描く浅鉢形土器である。口縁部の文様帯には截痕列とＣ字状文が彫刻的手法によって描かれている。体部には全面ＬＲ縄文が横位回転施文されている。２は頸部に１段屈曲部をもつ浅鉢形土器である。口縁部は大きく外傾する。口唇上にはＢ突起が１箇所に付けられている。口縁部～体上半部の文様帯には、１同様截痕列とＣ字状文が彫刻的手法によって描かれるが、Ｃ字状文は３段に重ねて施文され、最下段（頸部屈曲部）のＣ字文は上向きと下向きのものが組み合う形で配置されている。体下半部にはやはりＬＲ縄文が施されているが、著しく磨滅している。３～７も体部がゆるい曲線を描く浅鉢形土器である。口唇上もしくは口縁部上端に施される文様として、截痕列か刻目列が採用され、体部には磨消縄文手法によって雲形文が描かれている。雲形文の構図は、３、４で流動的であるのに対し、５～７ではやや硬直化したものとなっている。地文として採用されているのは全てＬＲ縄文である。８～13は口縁部から体部にかけて直線的におりる浅鉢形土器である。口唇上にはＢ突起列が並び、口唇内面には刻目を施した隆帯がめぐる（11を除く）。口縁上端には２条の平行沈線

がめぐったり（９～13）、截痕列（８）が施されている。体部は全面磨消縄文手法による雲形文の構成する文様帯で占められている。地文に使用される原体は８がＲＬ、９、10、12、13がＬＲである。14～22は頸部で大きく「く」の字形に屈曲する鉢形土器である。口縁上端が短く直立するもの（14～17・19～21）と、内傾したままのもの（18）とがある。口唇上には刻目列が施され、またＢ突起が付けられる（16・18）。口縁部の文様帯には平行する沈線を２～数条施文したのち、そのうちの最上段の１条に刺痕列を加えるもの（14～16・22）と、単に平行線だけのもの(17)、頸部の屈曲部にメガネ状付帯文を施すもの(19～21)、同じく頸部の屈曲部に刻目を施した隆帯をめぐらしＢ突起を配するもの（18）がある。これらの土器は口縁内面にも１条の沈線がめぐる。体部には、偏平な横位楕円文をモチーフとする文様帯が設けられる例(19・21)と全面縄文を施すもの（14・15・17・22）とがある。採用される縄文は、ＬＲ原体の横位回転施文したものである。23～30は口縁部に把手または突起を付した鉢形土器である。23、24は19～21同様「く」の字形に屈曲する頸部にメガネ状の付帯文をもち、その１箇所から口縁上に向けて大きな把手がのびる。把手の頂部は二又に分かれている。25～27は口縁上にＡ突起が付けられている。25、26は同一個体である。口唇上には刻目が施され、口縁上端には截痕列がめぐる。27は突起上も含めた口唇上に１条の沈線がめぐる。口縁上端には２条の沈線によって工字文が描かれ、その下は広い無文帯となる。この土器については、その傾きから本来の器形が口縁部～頸部の大きく外傾する壺形土器になるものと思われる。28、29は口縁上に２つのＡ突起が並ぶものである。29では片側の突起部分を欠いている。突起下では無文帯から突起の形状に沿って大きく三叉に抉り込まれている。28では頸部の屈曲部にメガネ状の付帯文が施される。30は口縁部直下から施される工字文中の隆線が、口縁上にのびて突起を作っている。破片の傾きから浅鉢形の器形をもつ土器を復原することが可能である。これらの土器はいずれも口縁部内面に１条の沈線をめぐらせている。31は口縁上端にゆるい屈曲部をもつ鉢形土器である。頸部の文様帯には、５条の平行沈線によって工字文が描かれている。すなわち最上段と最下段は平行にめぐり、２段目と３段目の沈線は「コ」の字形に反転する。その間に４段目の沈線が上に向かって肢線をのばすことにより、工字文が形づくられている。体部にはＬＲ縄文が横位回転施文されている。32、33は口唇上に連続した刻目を施し、口縁部に５～６条の平行沈線をめぐらす深鉢形土器の破片である。34、35は台付土器の台部の破片である。台部下端には２条の平行沈線がめぐり、34では台部全面に沈線による文様が描かれている。台部の大きさから推して土器本体は浅鉢形を呈すると思われる。

（第19図１～14）

１～14は器面全面に縄文を施した粗製深鉢形土器である。１～９・14は平縁でやや内傾する口縁部形状をもつ。14は口唇上にＢ突起が付けられた例である。10、11は同じくやや内傾する

口縁部形状をもつが、口唇上に連続した指頭の圧痕を施して小波状に作り出した例である。12、13は口頸部にゆるやかな屈曲部をもち、口縁上端は外傾する。13は10、11同様口唇上に連続した指頭圧痕が施される。器面に施される縄文は、ＬＲ原体の横位回転施文のものが圧倒的に多い。ＲＬが施されるのは６、10の資料である。また７、８のようにＬＲとＲＬの両原体を用いて羽状縄文を表出させたものや、９のように原体に結節部を作り綾絡文の施された例もある。器壁には、砂粒が多く含まれているが、内面の調整は比較的丹念に行われている。

以上は、縄文時代晩期の大洞諸型式の土器に伴ったものであるが、粗製土器の流れの中では、10、11のような小波状口縁のもの、12、13のような屈曲部をもつものは、その後半の時期にみられる。石名館遺跡の場合には大洞Ｂ式から大洞A′式に至るまでの精製土器が認められるのであり、10～13の資料は、その後半期大洞C_2式、大洞Ａ式期に伴ったものであろう。

③遺構内外出土石器

石器類は遺構内外から、石鏃２点、石錐５点、石匙12点、掻器３点、打製石斧11点、磨製石斧10点、石刀・石剣10点、凹石23点（うち８点のみ図示した）、石皿１点、円盤状石製品２点、偏平礫石器１点やこれらの破片などが出土している。

石鏃（第13図１・２、第１表）

いずれも頁岩製の石鏃である。１は本体から基部が薄く仕上げられ、ことに基部の部分は柄によって挟み込むことが可能なように弯曲して作られている。２は有茎の石鏃である。柄の部分へ挿し込み式に装着するため、茎の部分は本体よりも長めに作られている。

石錐（第13図３・４、第１表、第20図１～４、第２表）

第13図３、第20図１～４は頁岩製で、第13図４は粘板岩製である。第13図３は錐の先端部分であるが、回転して使用したことにより生じたと思われる磨滅した状態が、その先に観察できる。第13図４は偏平な剥片の外縁に加工を施して全体の形を仕上げている。基部に比較して錐部は幅広で錐として用いられたものかどうか疑問も残るが、ここでは一応石錐の項に含めて扱う。第20図１、２は基部を含めて丹念な二次調整が施されている。１の錐部が比較的短いのに対し、２のそれは断面形を四角にして長く作り出されている。第20図３も１と同じように短い錐部の作り出されたもので、基部にはほとんど手が加えられていない。第20図４は縦に長い剥片の打面と反対側のわずかに尖った部分を利用して、その両側縁にわずかに細かな二次調整を加え、錐としての形を整えている。実際の使用にあたっては、尖端部よりもむしろその両側縁に加えられた二次調整部分を刃部として用いている可能性もある。

石匙（第13図５、第１表、第20図５～11、第２表、第21図12～15、第２表）

第13図５、第20図５～11は縦形の石匙である。第13図５は縦長の剥片の打面側につまみ部を

作り出すための二次調整を行っている。本体の刃部は素材となった剝片の一次剝離の鋭利な縁辺をそのまま用い、二次調整は行っていない。第20図５、６は本体側縁の一方が鉤状に尖るものである。５は本体部分を鉤状に内弯する部分も含めて、素材の両側から丹念に二次調整加工しているが、６はつまみ部分と鉤状の先端部分にだけ加工を施している。第20図７～11は全て素材剝片の打面側につまみ部を設けている。本体部分の二次調整は素材の主要剝離面側から施しているが、８は表面左側の側縁についてだけ、両面からの加工を施している。第21図12～15は横形の石匙である。つまみ部の位置が12、13では偏平な楕円形を呈する本体部分のほぼ中央位置に、14、15は三角形の本体の頂角の位置に設けられている。12はつまみ部が素材の打面側に作り出され、本体部分の加工は素材剝片の表面側から施されている。13もつまみ部分は素材の打面側に設けられ、本体の二次調整は上縁では素材の両面から、下縁では素材の表面側から行われ、表面側から行われる調整は本体中央まで及んでいる。14は素材剝片を剝ぎ取った時の打面が本体の表面右下端に残されている。本体縁辺の加工は全て素材の主要剝離面側から行われている。15はつまみ部を欠損している。表面には自然面が残り、本体の縁辺の加工は斜辺では、表面と主要剝離面の両側から、底辺では主要剝離面側から行われて、弧状の刃部が作り出されている。

以上の石匙については石材は全て頁岩である。

掻器（第21図16～18、第２表）

第21図16は横長の剝片を素材とした掻器である。素材剝片の打面側は、両面からその反対側は主に主要剝離面側から、二次調整を施して形を整えている。図の下側においた刃部（両面から加工を施した部分）は、直線的に仕上げられているが、上側（主要剝離面側からの加工を施した部分）ではゆるい弧線を描くように作られている。第21図17は両側縁が弧線を描くように仕上げられている。表面右側縁は主要剝離面側から、先端および左側縁では表面および主要剝離面の両面から加工が施され、図の上縁では大きく残った打面からの加工が行われている。裏面（主要剝離面側）には打瘤がそのまま残されている。18は両面からの丹念な調整によって木ノ葉状に仕上げられた掻器である。素材となった剝片の表面と主要剝離面とも周縁からの加工によって剝ぎ取られ、右側においた図の上部にわずかに主要剝離面の剝ぎ残された部分をみることができる。

以上の掻器は３点とも石材は全て頁岩である。

打製石斧（第22図19～23、第２表、第23図24～29、第２表）

石材は主に粘板岩などの板状節理をするものが用いられているが、第23図24、27のように頁岩を用いて製作されたものもある。形態には撥形（第22図19、22、23、第23図26、28、29）と分銅形（第22図20、21、第23図24）、それに肉厚の握斧形（第23図25、27）がある。製作にあた

っては石材の性質上、面的に剝ぎ取ることのできる上下端からの加撃と、それのできない側縁に施される細かな敲打とかうまく使い分けられている。こうした全体の形状を整えるための加工がなされた後に、基部～本体の両面を磨くことにより細部の調整を行って仕上げている。第22図19は本体～刃部を欠損している。基部の両側縁は細かな敲打によって形が整えられ、両面はその後磨かれてほぼ平滑に仕上げられている。第22図20は本体の両側縁を敲打することにより弧状に整え、その両面および基部、刃部の側縁を磨いて分銅形に仕上げている。21も同様側縁を敲打した後、本体片面に限って一部研磨されている。刃部を欠損している。第22図22は図の左側において面およびその左側縁が研磨されている。第22図23は基部の両側縁が細かな敲打で整えられた後、基部から幅の広い刃部にかけてその両面が研磨され、さらに刃部の側縁も研磨して仕上げている。第23図24は素材の母岩を打割して得られた剝片に大まかな剝離を加えた後、基部の部位を中心に細かな敲打を加えている。刃部には使用によって生じた磨滅が観察される。25は全体に粗く剝離を加えた後、図においた左側の面の一部に研磨が施されている。刃部を欠損している。26は素材の周縁に粗い剝離を施した後、図の左側においた面にわずかに研磨を施している。基部を欠損している。27は母岩を打割して得られた素材全体に大きな剝離を施して全体の形を整えている。28は図においた左側の面および両側縁が研磨によって仕上げられている。29は両側縁が磨かれ、刃部には使用による磨滅が観察される。

磨製石斧（第24図30～39、第２表）

石材には主に凝灰岩を用いている。全例とも本体両面と側面の間には明瞭な稜線が残る。刃部は磨滅してしまったもの（30、33、38、39）や大きく破損してしまったもの（32、34、35、36）、本体中央で打損してしまったもの（31）があり、使用不能となってしまったものがほとんどである。刃部本来の形状をしることのできる(37)の資料も、図の右側の面が大きく剝落してしまっている。

石刀・石剣（第13図６・７、第１表、第25図40～47、第２表）

石材には粘板岩が用いられている。　断面形が偏平な石刀（第25図40・45・47）と丸い石剣（第25図41～44・46、第13図６・７）がある。　第25図40は石剣の頭部である。　特に沈刻などの文様は施されていない。45は峰の部分に１条の沈刻線が施されている。また47は峰の部分に３本の刻みが入れられている。

凹石（第14図１・２、第１表、第26図48～52、第２表）

安山岩、砂岩などが石材として用いられている。拳大な円礫を素材とし、その表裏両面に１～２箇所ずつの凹みがつくられている。

石皿（第26図、第２表）

砂岩製の石皿の断片である。表面に磨り石との摩擦によってできあがったなだらかな凹みが

認められる。一部火熱を受けて赤変した箇所が観察される。

円盤状石製品（第26図54・55、第２表）

安山岩が使用されている。いずれも半欠品である。54は径５～６cm程の円礫を輪切りにするかたちで作られている。外縁には素材の円礫の自然面が残る。55は偏平な礫を素材として作られている。図の左側においた面は極めて平滑である。外縁は打ち欠いて整形している。

偏平礫石器（第13図８、第１表）

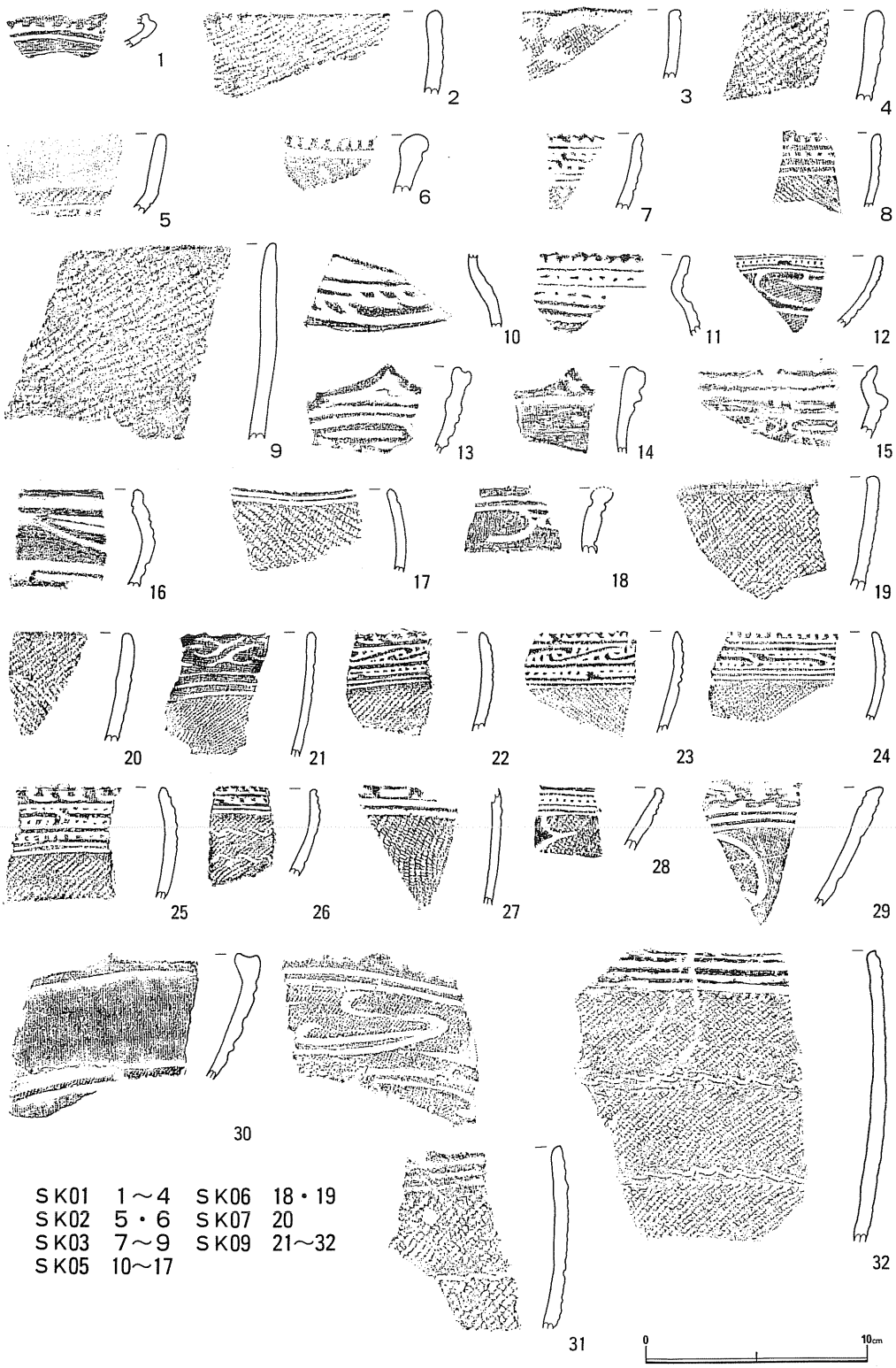
細長い偏平な河原石の先端に、交叉する２方向からの加撃による、ちょうど石錘に施されるような剝離が認められる。片側は折損している。

④遺構外出土土製品

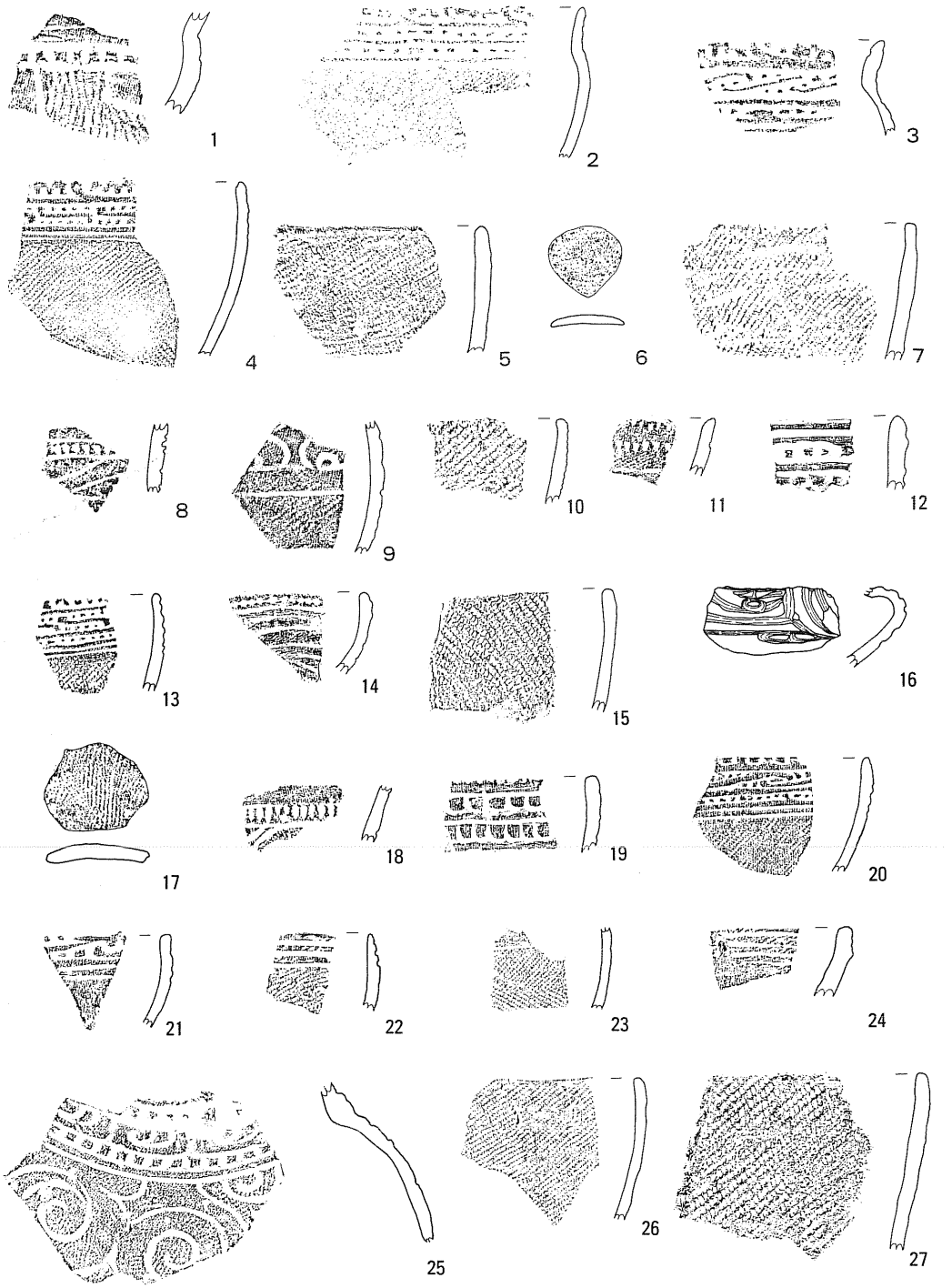
15は偏平な土偶の頭部である。首の上に板状の顔面をつけている。顔の細部は、額から顔面中央部にかけて「Ｙ」字形に粘土紐をはりつけて、まつげから鼻にかけてを表現している。鼻孔は先端の尖った施文具による２箇所の刺突で表されている。口腔はやや上方に向けて大きくあけて表現され、下顎は欠損しているがおそらく前面に突き出していたと思われる。胎土にはやや砂粒を含んでいるものの、良く選り分けられた粘土が用いられ、明るい色調に焼き上げられている。顔面に表された表情は、後期の土偶の特徴をよく表している。

16は中空土偶の左肩から腕にかけての部分である。腕の付け根には径10mmの粘土瘤をはりつけて表現した乳房の痕跡が残る。肩から腕にかけては水平方向に沈線がめぐらされている。腕の先端には先を二つにわけて簡略に表現した手がつけられている。

17は棒状の脚部分である。折損の状態から腰の部分はそれほど大きく作られているものではなく、胴から下肢にかけてほぼ寸胴のようである。やや内側に反った脚の付け根には、２条の平行沈線と斜線によって下穿きと思える衣類が表されている。この衣類から伸びる脚は一段の段差を付けて表されている。足の部分は半分が欠損しているが、幾分くびらせて足首を表現し、丸く簡略に作られている。16・17は胎土に微細な砂粒を混入している。焼成は堅く、黒色に仕上げられている。縄文時代晩期の製作である。



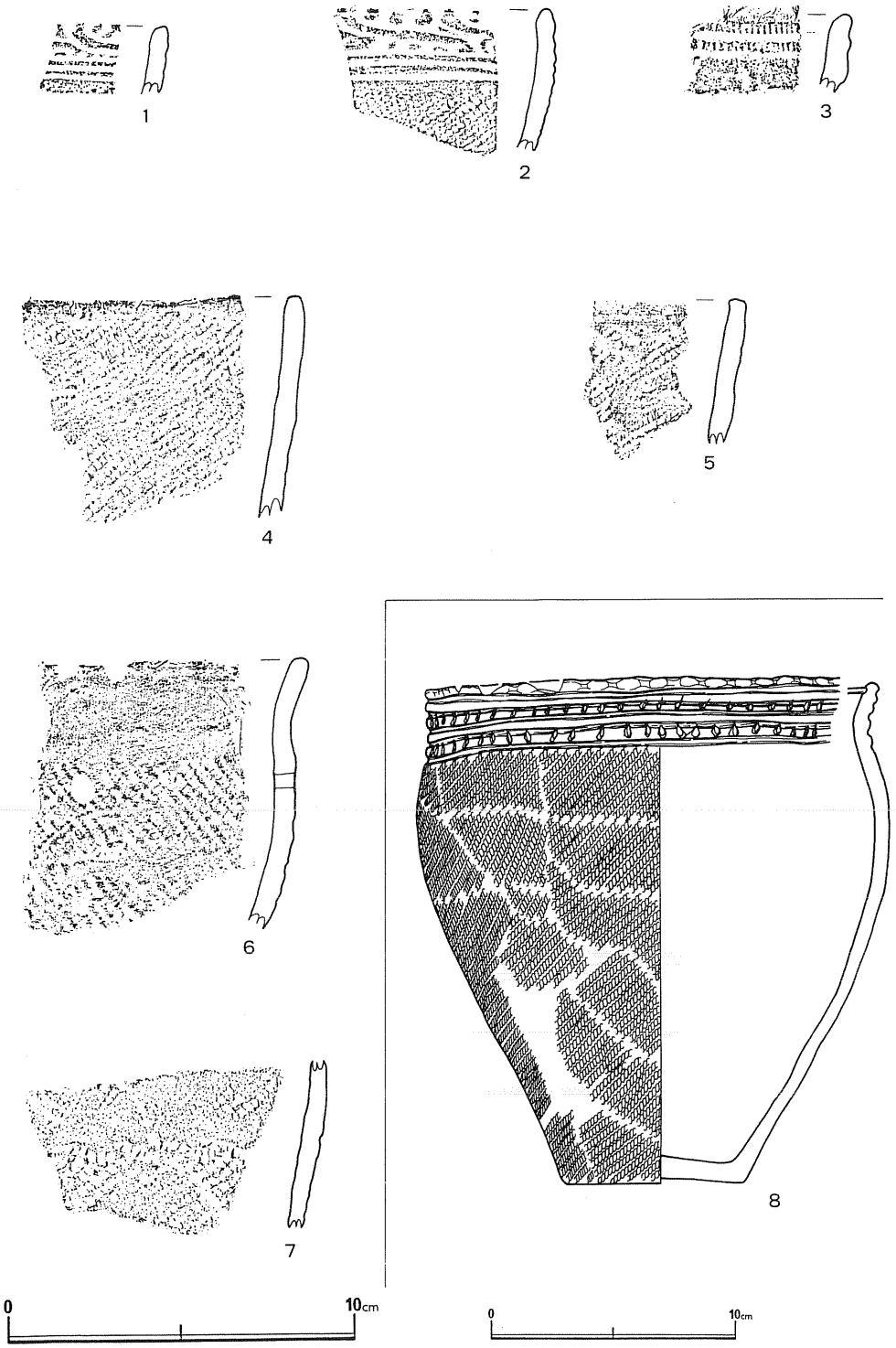
第９図　遺構内出土土器（１）



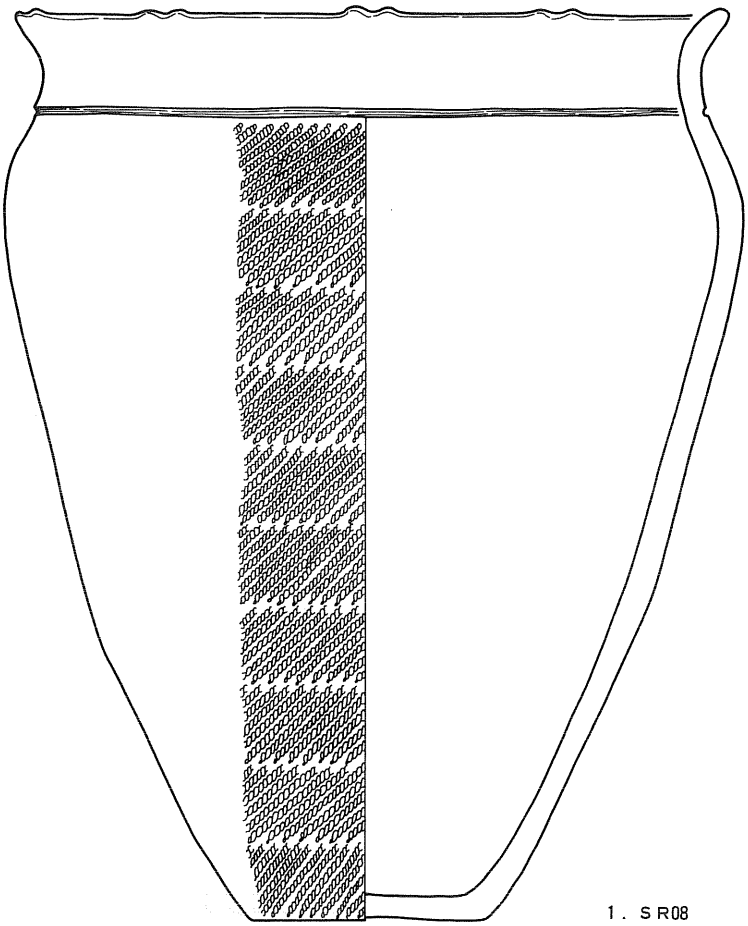
ＳＫ11　１・２　ＳＫ18　11～15
ＳＫ12　３～６　ＳＫ19　16
ＳＫ15　７　ＳＫ20　17
ＳＫ16　８～10　ＳＸ10　18～27

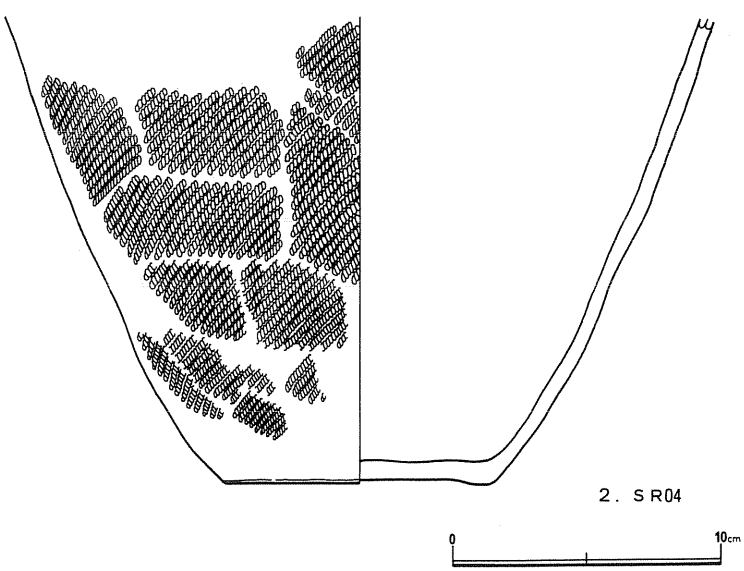
0　10cm

第10図　遺構内出土土器（２）

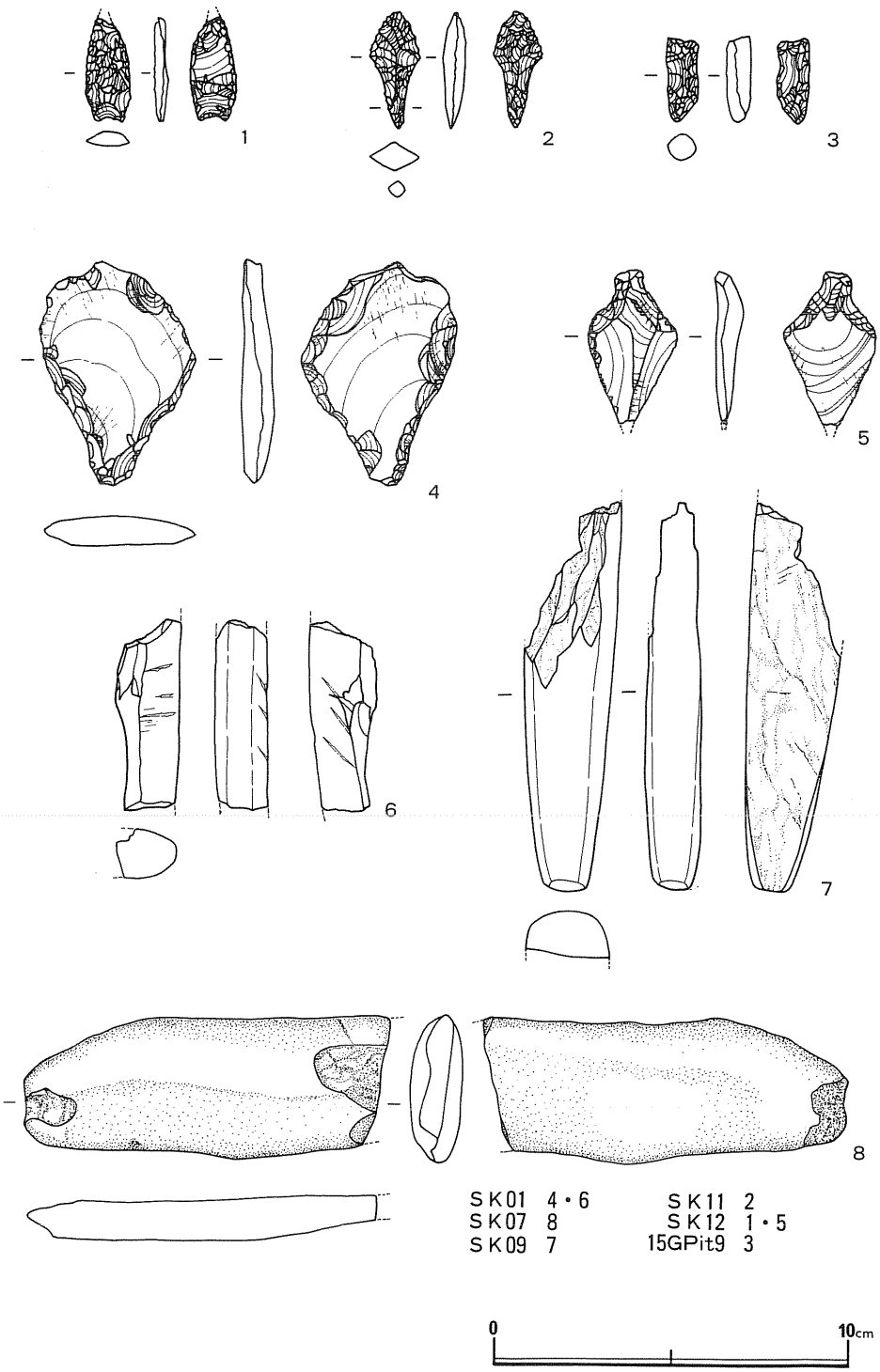


第11図　遺構内出土土器（３）

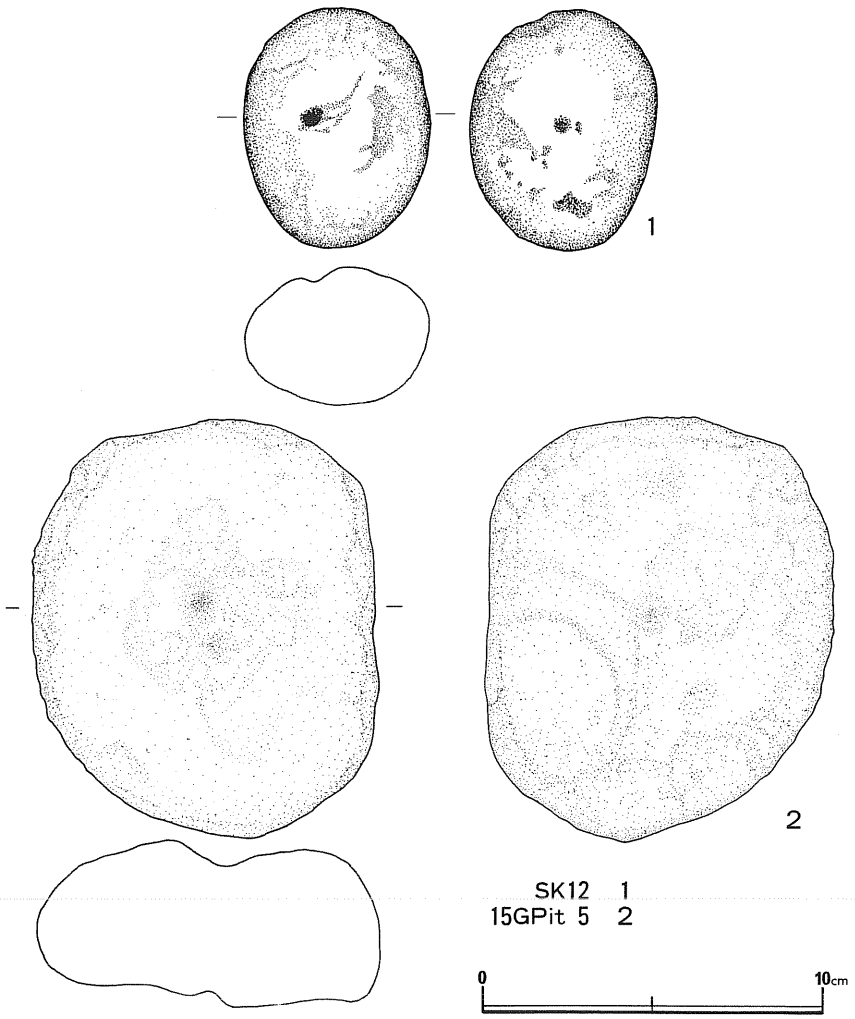




第12図　ＳＲ04・08埋設土器



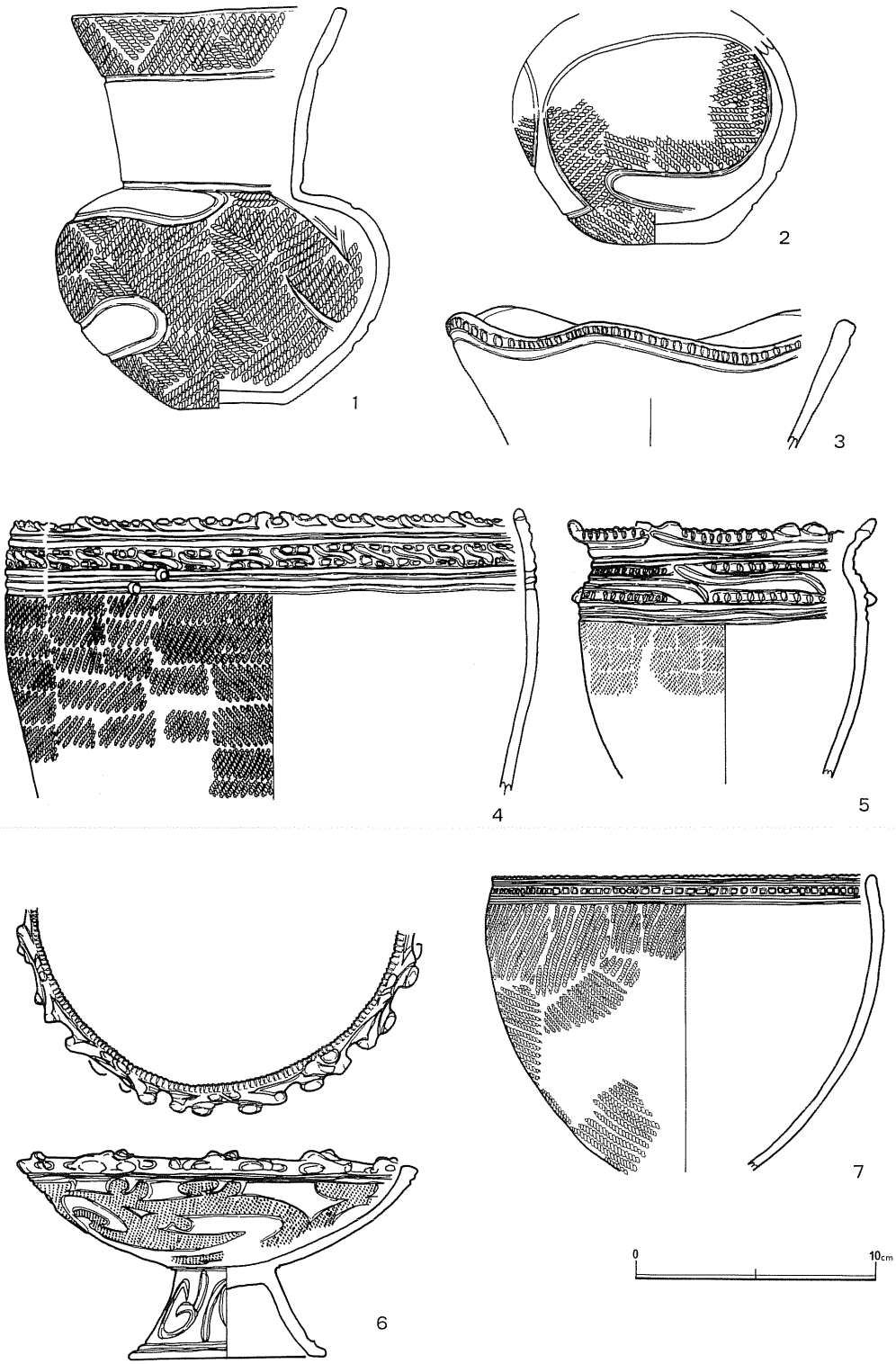
第13図　遺構内出土石器（１）



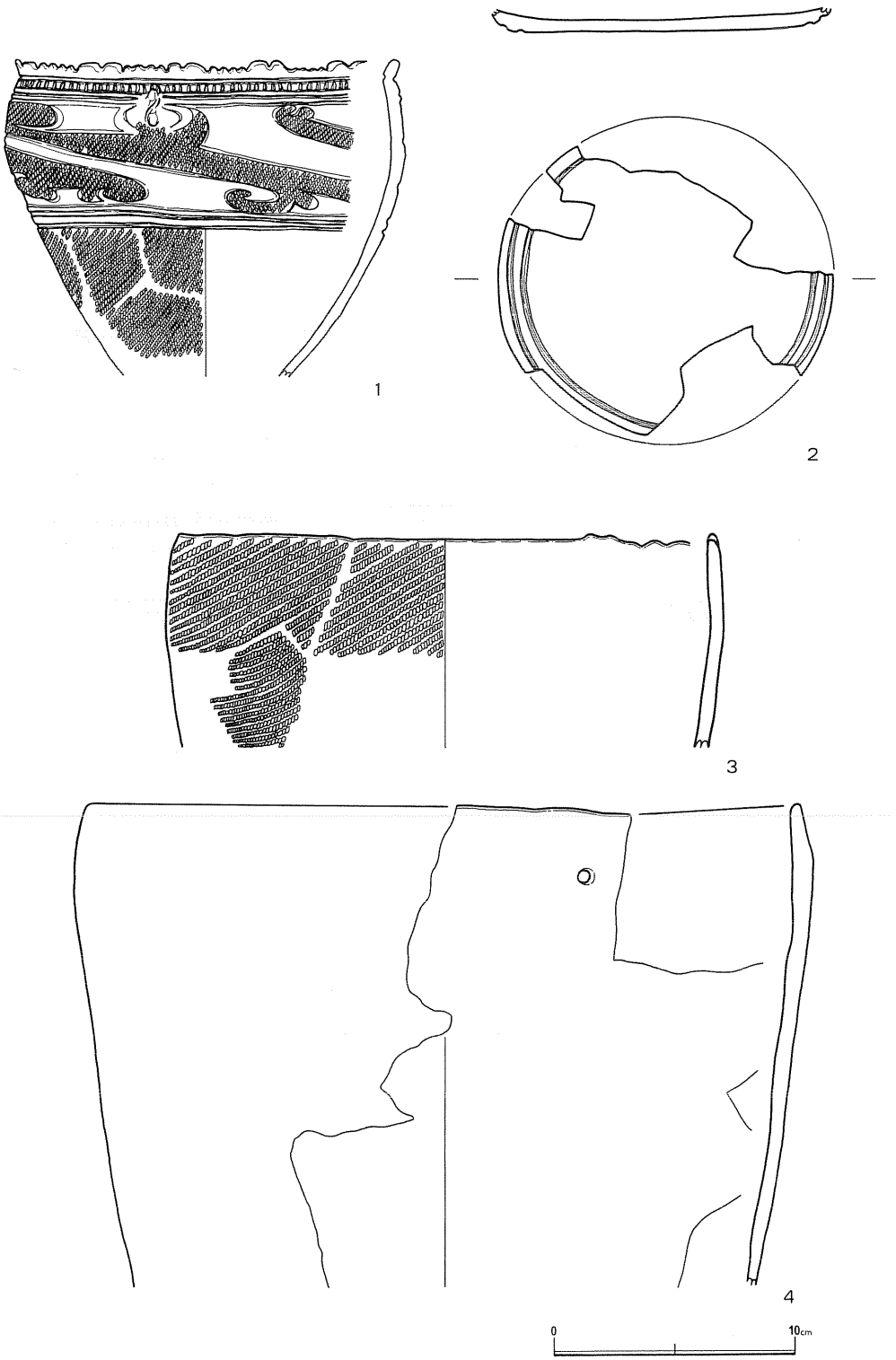
第14図　遺構内出土石器（２）

挿図番号	名　称	出　土　地	長さ(cm)	幅　(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石　質	備　考
13-1	石　鏃	ＳＫ12覆土中	2.9	1.3	0.4	1.6	頁　岩	先端部欠損
13-2	石　鏃	ＳＫ11覆土中	3.3	1.4	0.7	2.3	〃	
13-3	石　錐	15ＧＰｉｔ９	2.4	0.9	0.9	1.8	〃	柄欠損
13-4	石　錐	ＳＫ01覆土中	6.4	4.4	1.0	25	粘板岩	
13-5	石　匙	ＳＫ12覆土中	4.3	2.6	0.8	5	頁　岩	先端部欠損
13-6	石　剣	ＳＫ01下　層	5.4	1.9	1.6	15.5	泥　岩	
13-7	石　剣	ＳＫ09覆土中	10.9	2.7	1.7	55	粘板岩	
13-8	偏平礫石器	ＳＫ07覆土中	4.0	10.2	1.5	65	安山岩	
14-1	凹　石	ＳＫ12覆土中	7.1	5.5	4.1	223	〃	
14-2	凹　石	15ＧＰｉｔ５	12.5	10.2	4.9	630	凝灰岩	

第１表　遺構内出土石器観察表



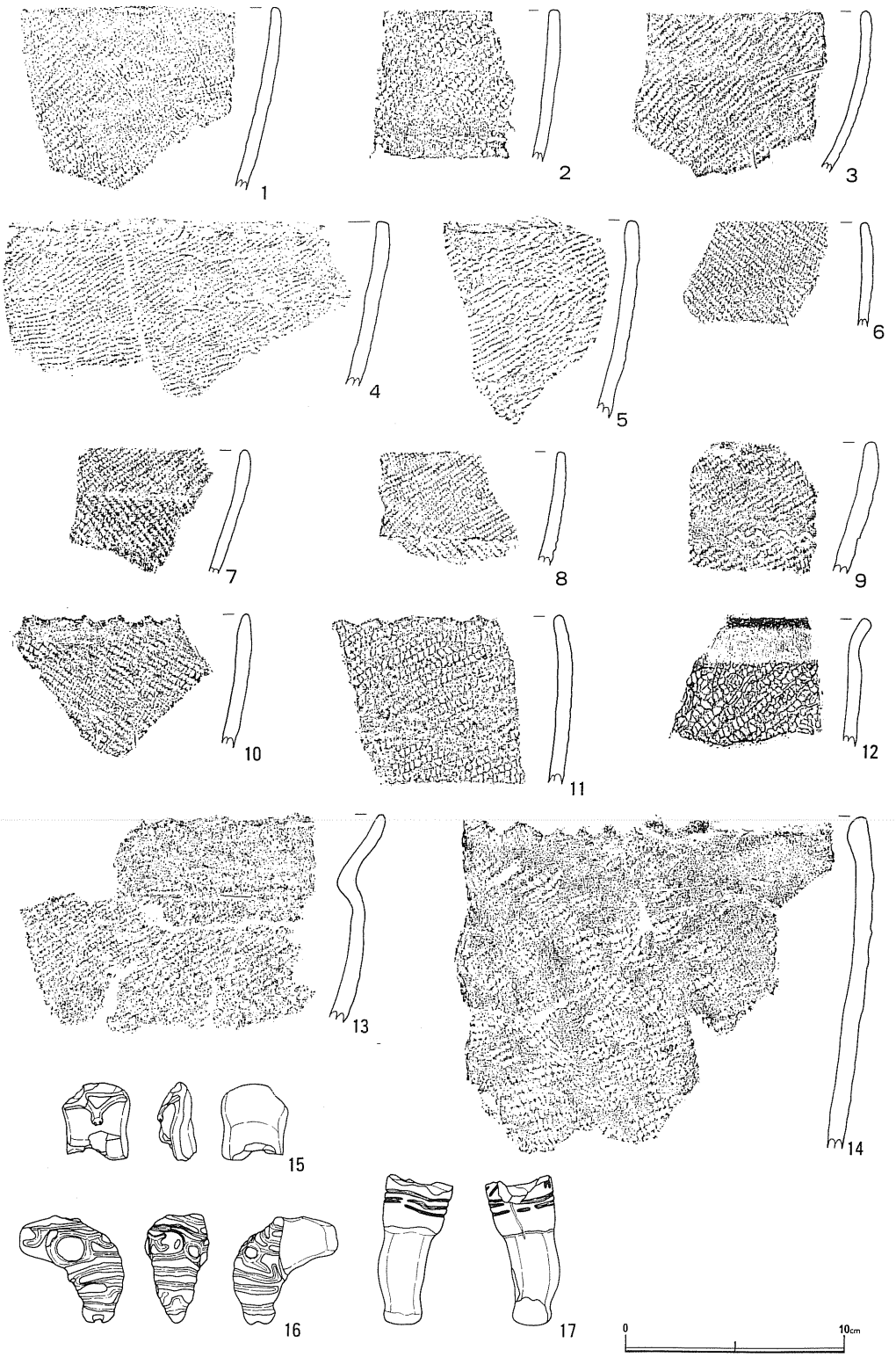
第15図　遺構外出土土器（１）



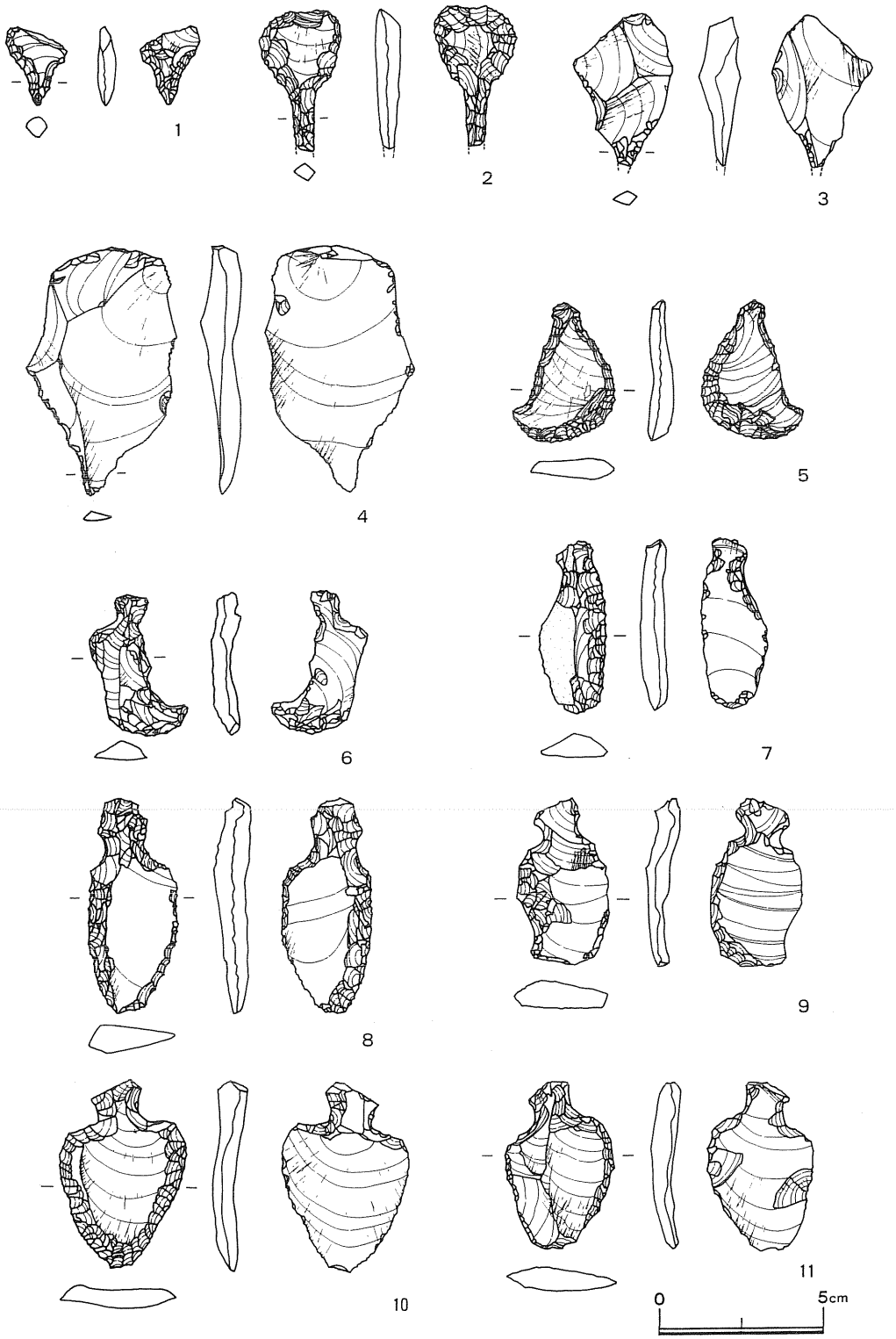
第16図　遺構外出土土器（２）

第17図　遺構外出土土器（３）

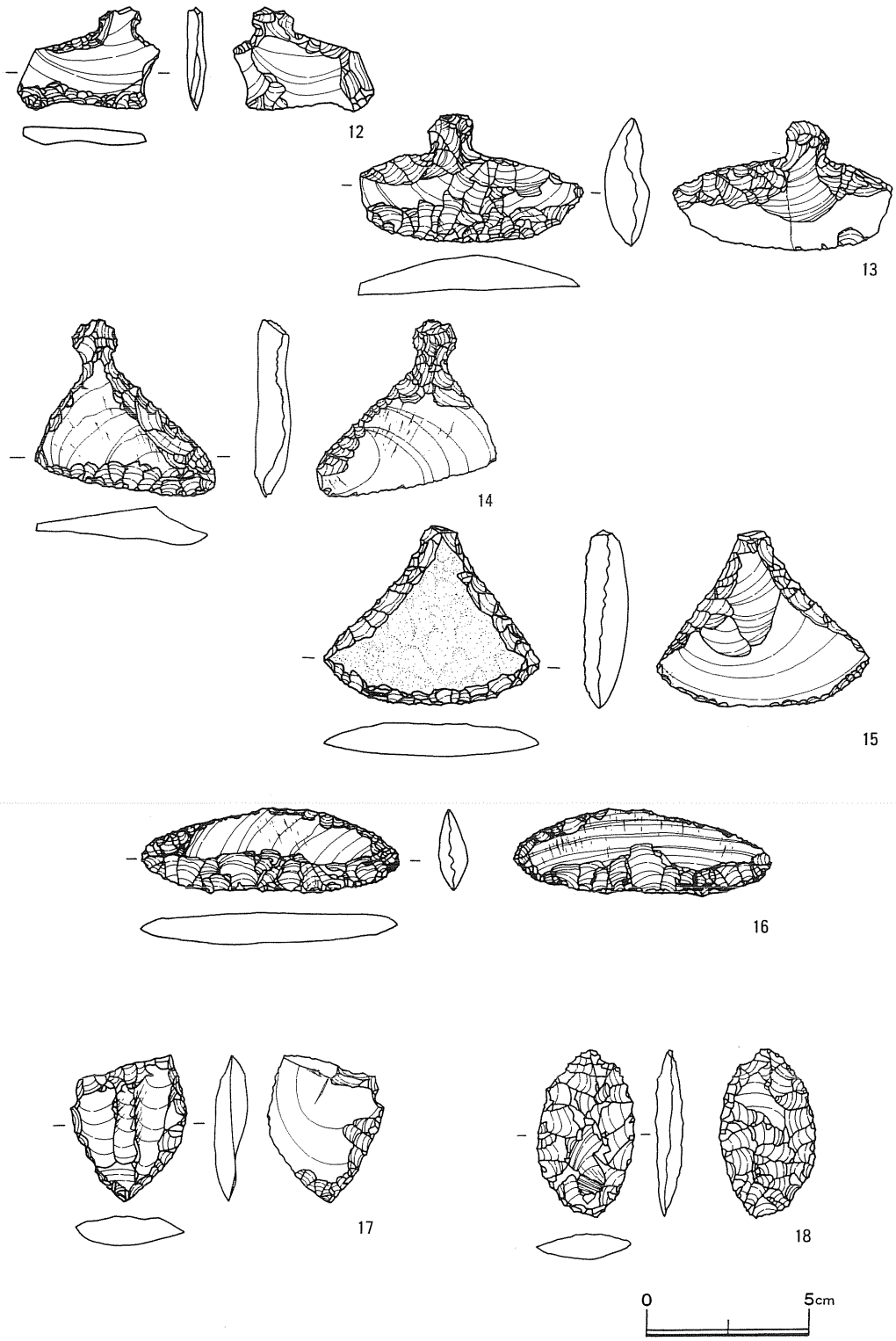
第18図　遺構外出土土器（４）



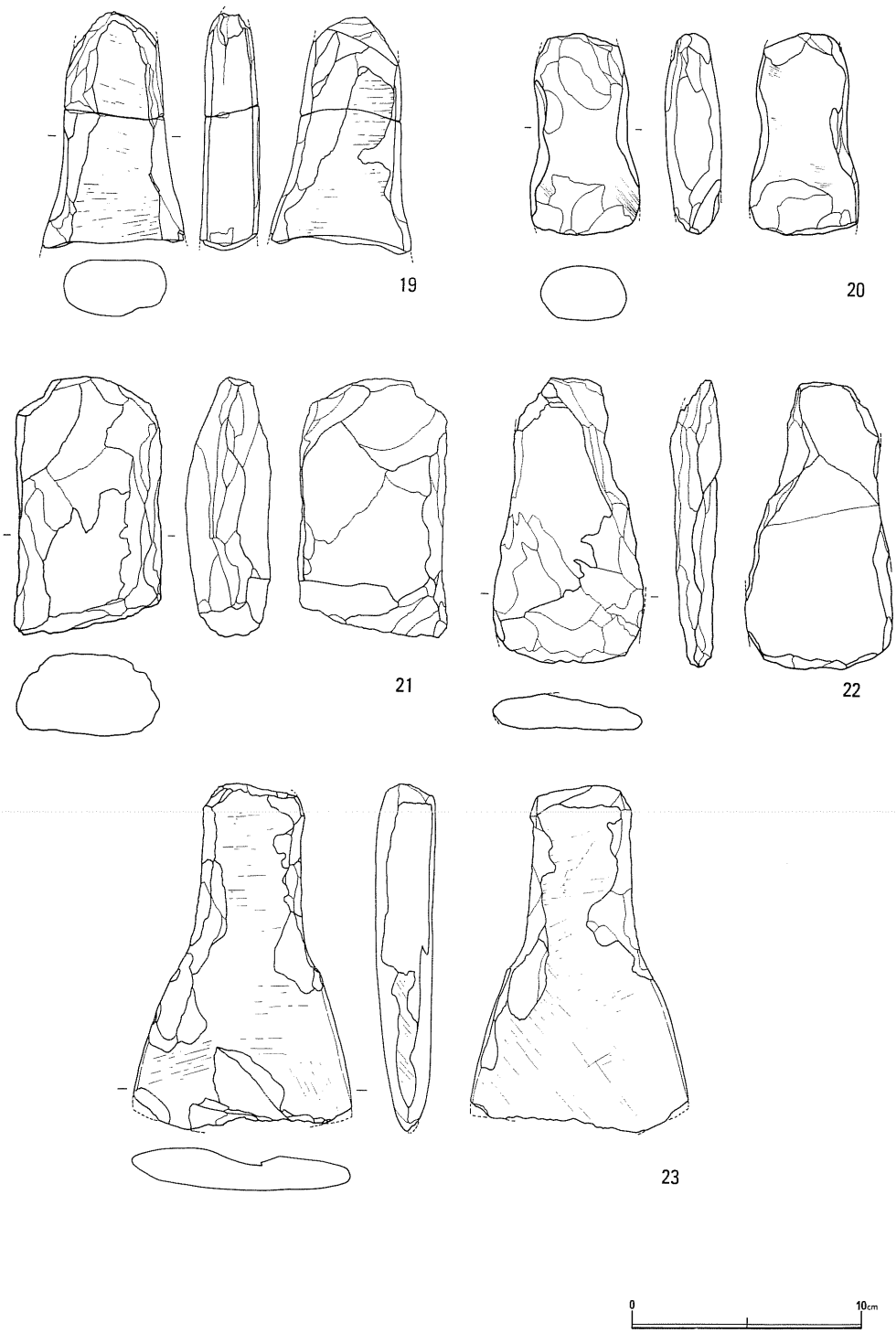
第19図　遺構外出土土器及び土製品（５）



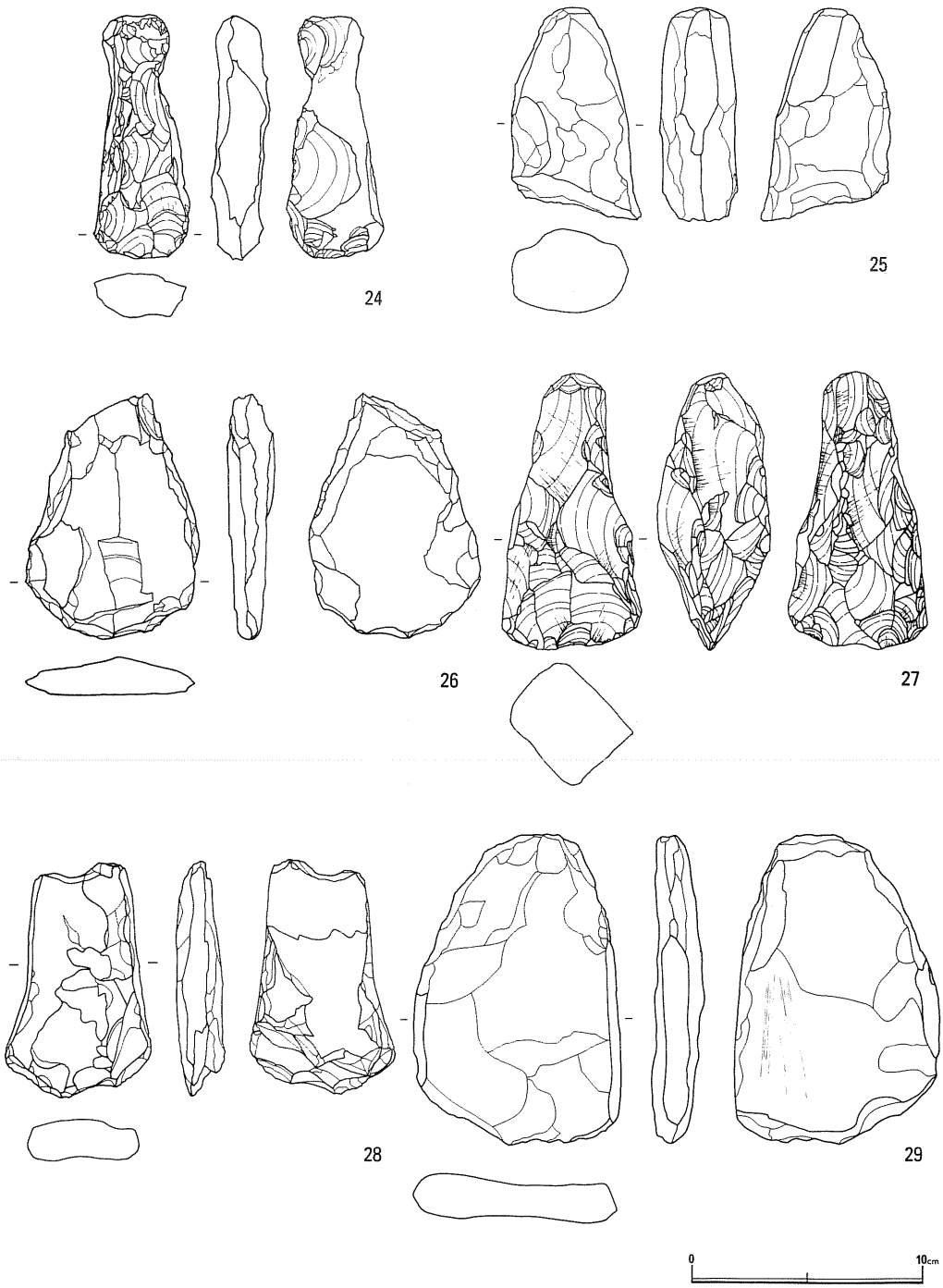
第20図　遺構外出土石器（１）



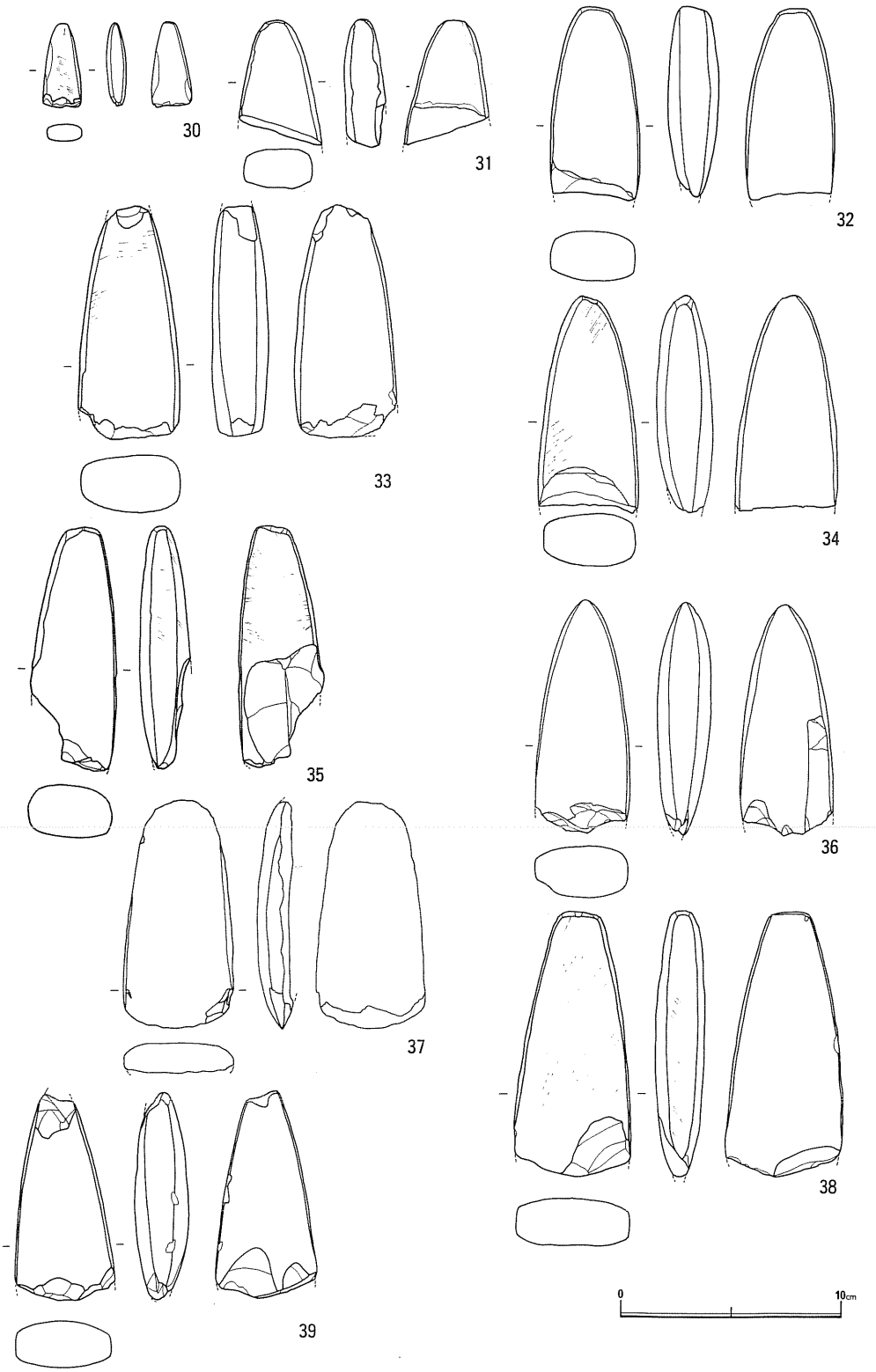
第21図　遺構外出土石器（２）



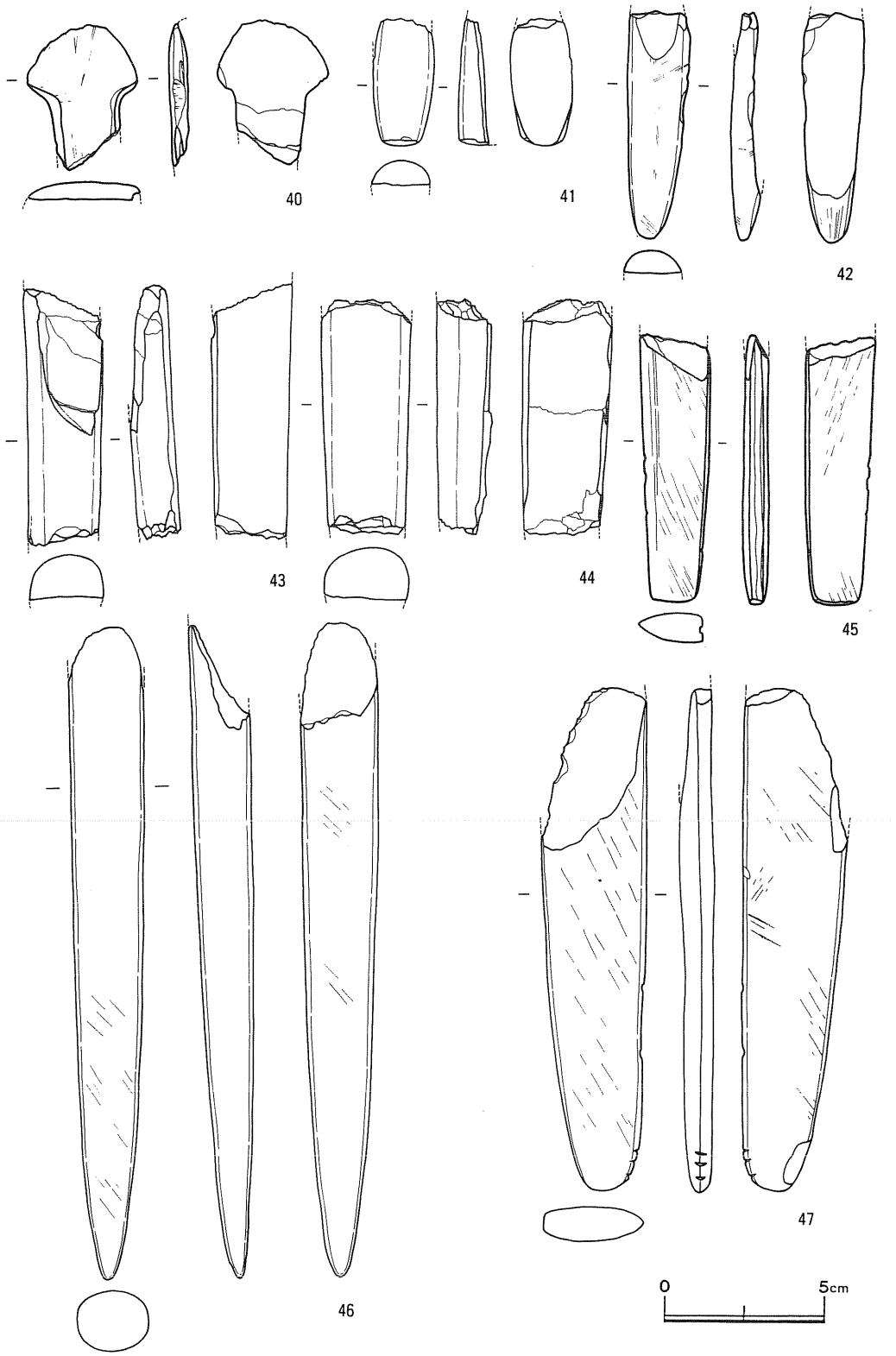
第22図　遺構外出土石器（３）



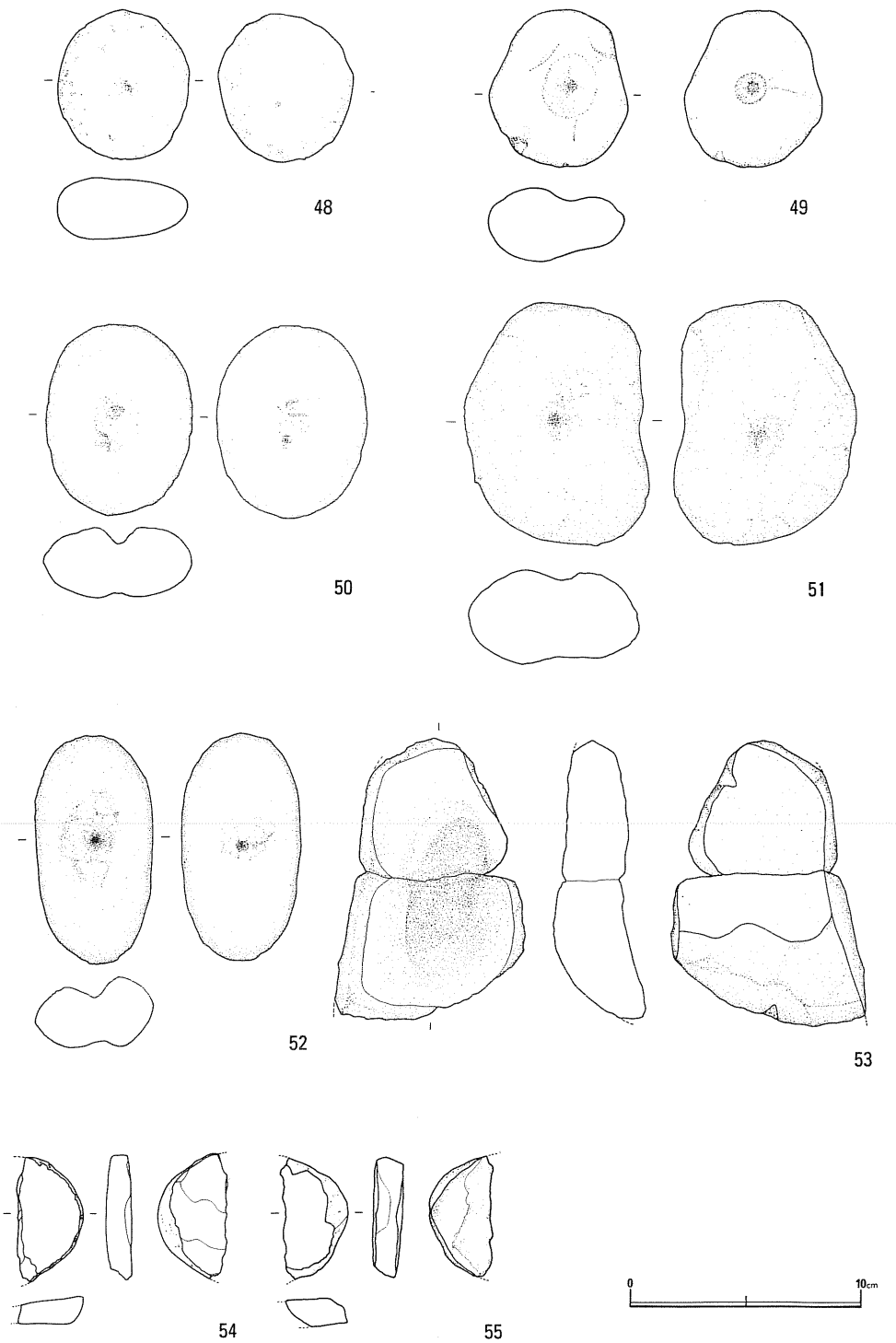
第23図　遺構外出土石器（４）



第24図　遺構外出土石器（５）



第25図　遺構外出土石器（６）



第26図　遺構外出土石器（７）

種類	挿図番号	出土地区	大きさ 最大長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
石錐	1	12G	2.2	1.7	0.6	1.8	頁岩	
	2	11G	4.2	2.4	0.7	6.2	〃	
	3	13G	4.5	3.0	1.1	9.5	〃	
	4	14G	7.5	4.4	1.0	25.1	〃	
石匙	5	11G	4.2	3.1	0.7	7.0	頁岩	
	6	12G	4.3	2.4	0.7	5.1	〃	
	7	15G	5.2	2.0	0.8	7.6	〃	
	8	15G	6.5	2.7	0.9	15.1	〃	
	9	12G	5.1	2.8	0.7	8.3	〃	
	10	11G	5.7	3.8	0.9	14.0	〃	
	11	12G	5.1	3.2	0.7	9.8	〃	
	12	11G	3.1	3.8	0.5	6.1	〃	
	13	12G	3.9	6.7	1.1	22.5	〃	
	14	13G	5.3	5.3	1.0	18.8	〃	
	15	11G	5.4	6.5	1.3	36.3	〃	
掻器	16	14G	2.5	7.7	0.9	16.5	頁岩	
	17	11G	4.4	2.5	0.9	12.3	〃	
	18	11G	5.1	2.9	0.8	11.7	〃	
打製石斧	19	13G	10.3	6.2	2.4	215	粘板岩	
	20	11G	8.8	4.8	2.4	143	〃	
	21	10G	11.0	6.4	3.8	380	〃	
	22	11G	12.5	6.5	2.1	187	〃	部分的に磨製されている
	23	13G	15.2	9.5	2.5	405	〃	
	24	13G	10.5	3.9	2.2	103	頁岩	
	25	11G	9.1	5.2	3.4	220	玄武岩	
	26	13G	10.6	7.2	1.8	165	粘板岩	
	27	12G	11.9	6.0	5.3	260	頁岩	
	28	13G	10.2	6.2	1.8	140	粘板岩	
	29	11G	13.4	8.9	1.9	350	〃	

種類	挿図番号	出土地区	大きさ 最大長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
磨製石斧	30	12G	3.8	1.8	0.8	8.2	粘板岩	
	31	11G	5.7	3.6	1.8	55.1	凝灰岩	
	32	14G	8.4	4.1	2.2	130	〃	
	33	13G	10.4	4.6	2.5	205	〃	
	34	14G	9.9	4.5	2.4	175	〃	
	35	14G	11.0	3.9	2.2	125	〃	
	36	11G	10.6	4.3	2.4	165	〃	
	37	11G	10.3	5.0	1.4	130	〃	
	38	13G	9.4	4.6	2.4	130	〃	
	39	11G	12.1	5.3	2.2	220	〃	
石剣	40	13G	4.4	3.4	0.5	9.3	粘板岩	
	41	13G	3.9	1.9	0.9	8.9	〃	
	42	13G	7.0	1.9	0.8	19.2	〃	
	43	11G	7.9	2.4	1.3	38	〃	
	44	12G	7.2	2.7	1.6	53.6	〃	
	45	14G	8.1	2.1	0.9	23	〃	
	46	14G	20.0	2.2	1.8	97.8	〃	
	47	14G	15.5	3.2	1.0	74.7	〃	
凹石	48	11G	6.0	5.6	2.6	148	安山岩	
	49	11G	6.8	5.9	1.8	57.9	泥岩	
	50	11G	8.3	6.4	2.0	190	砂岩	
	51	12G	10.5	7.7	2.9	270	凝灰岩	
	52	11G	9.9	5.1	2.0	187	安山岩	
石皿	53	11G	12.0	7.8	3.3	280	砂岩	
円盤状石製品	54	11G	5.5	2.9	1.1	21.3	安山岩	
	55	11G	5.3	2.7	1.2	22.6	〃	

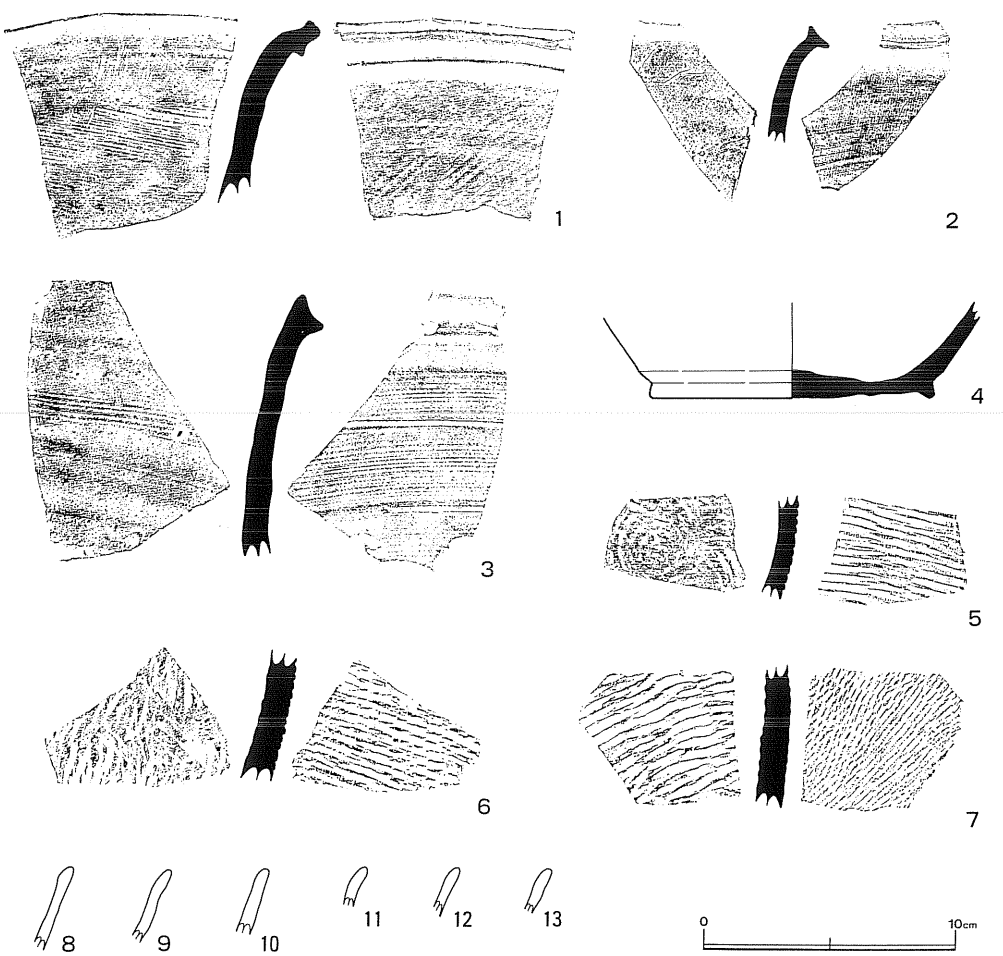
（単位はcm及びｇ）

第２表　遺構外出土石器観察表

2　平安時代の遺物

須恵器壺・甕、土師器杯などが出土した。いずれも細片で全体の形状のわかるものはない。

１～７は須恵器で、１・３は大形広口壺である。１は外面に平行タタキ、内面にはカキ目が施されている。胎土には石英粒、砂粒をわずかに含み、色調は外面が暗褐色、内面が暗灰色である。２は内面にナデがわずかにみられる。胎土、焼成とも良好で、内外面は青灰色である。３は内外面にカキ目が施されている。内外面とも暗灰色である。４は壺の底面でわずかに削り出し高台が付く。底部外面と見込み部にはヘラ状工具による整形痕が残っている。色調は内外面とも暗灰色である。５～７は甕の胴部で外面はいずれも平行タタキを有する。内面は６が同心円、７は平行アテ具痕が認められる。８～13は土師器杯の口縁部で、内外面とも赤褐色を呈する。



第27図　遺構外出土遺物

第５章　まとめ

石名館遺跡の上総川排水路改修工事に係る本年度の発掘調査は、工事区域内中央部に所在する家屋の移転問題によって、秋期と冬期の２時季にわたる発掘調査となった。

秋期の発掘調査は家屋東側の水田、用水路、農道と西側の村道にかかる部分である。東側の調査区からは土壙、土器埋設遺構、柱穴様ピットが検出されると共に多量の縄文時代後期中・末葉と晩期前・中・後葉大洞Ｂ～Ａ′の土器片や石器が出土し、西側村道部分でも同種の土器片及び平安時代の須恵器片、土師器片などが出土した。しかし遺物包含層は東側に比べ薄く、その量は少なかった。

冬期の発掘調査は厳冬期の１月下旬～２月上旬である。調査区は上屋を架設して調査を行ったが、夜間の寒気のため翌朝は土が堅く凍結しており、ガスバーナーで融解してから発掘を行なわねばならず、その上降雪と吹雪の日が殆どで、狭い屋内での人工燈下の遺構の確認、実測、土色等の記録作業は難渋をきわめた。遺物包含層は家屋造成等によって掘り返しを受けており、撹乱が著しく、縄文時代後期・晩期の土器片や平安時代の須恵器片・土師器片などが入り混じって出土した。また遺構は土壙、柱穴様ピットを検出した。

小西宗吉氏による石名館遺跡の発掘調査地点は、今日の水路部分の調査箇所よりも幾分標高の高い石名館集落南部の高橋喜則氏宅周辺である。昭和58年度と本年度に調査した箇所は、ほぼ東西に連なる水路部分で総延長は 200ｍにおよぶ。このうち地山レベルの最高所は宅地及びその東側の部分である。この地点から柱穴様ピット、土器埋設遺構や多くの土壙が検出されたのは、現在の集落の所在する微高地の末端がこの部分までのびてきており、今年度の発掘調査は遺跡の周辺部を調査したことを物語っていると考えられる。土器埋設遺構と数多くの土壙は墓域の可能性を知らしめている。

平安時代の遺物は須恵器甕、土師器杯の破片である。昭和58年度の調査で出土した須恵器の多くは蛍光Ｘ線分析法による胎土分析、産地推定では、９世紀中葉に位置づけられる大曲市成沢窯跡製品と推定されており、今回の発掘調査による出土品もほぼ同様と考えて大過ないものと思われる。

昭和初期から縄文時代晩期の優品と泥炭層による植物性遺物で注目されてきた石名館遺跡は、昭和58年度と本年度の調査によって新たに縄文時代後期前葉から晩期後葉と平安時代、中世、近世にわたる複合遺跡であることが判明した。

参考文献

奈良修介・豊島　昂　『秋田県の考古学』　郷土考古学叢書　1967（昭和42）年

藤田亮策監修・日本考古学協会編　『日本考古学辞典』　1974（昭和49）年

秋田県　『秋田県史』　考古編　1977（昭和52）年

秋田県教育委員会　『湯出野遺跡発掘調査概報』　秋田県文化財調査報告書第53集　1978(昭和53)年

秋田県教育委員会　『梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第63集　1979（昭和54）年

秋田県教育委員会　『内村遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第82集　1981(昭和56)年

秋田県教育委員会　『藤株遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第85集　1981(昭和56)年

野口義麿編　『縄文土器大成　第３巻　後期』　1981（昭和56）年

鈴木公雄・林　謙作編　『縄文土器大成　第４巻　晩期』　1981（昭和56）年

秋田県教育委員会　『平鹿遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第101集 1983(昭和58)年

秋田県五城目町教育委員会　『中山遺跡発掘調査報告書』　1984（昭和59）年

調査区遠景(東▶西)

調査区近景(東▶西)

① 秋期調査　マイクロバスの空地
② 冬期調査　家屋・敷地

第二図版

14G・15Gの
調査前の様子
(西▶東)

14G～15G
(東▶西)

11G
(西▶東)

秋期発掘調査状況

第三図版

12G～13G
(西▶東)

13G

12G
(西▶東)

冬期発掘調査状況

第四図版

SK01

SK02

SK06

SK03

SK05

第五図版

SK07

SK11・SK10

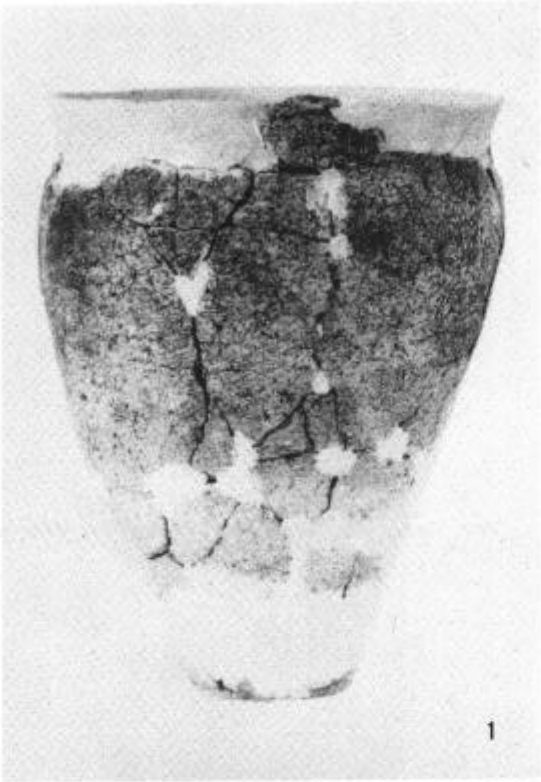
SK12・13

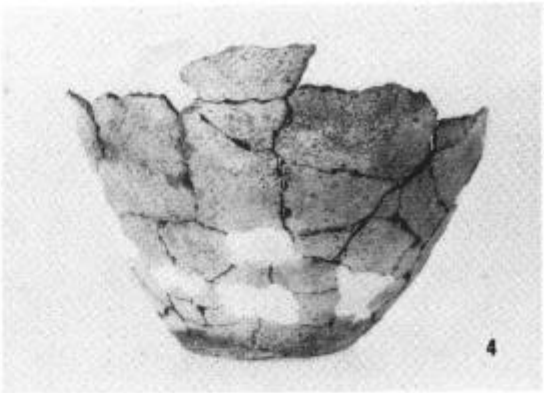
第六図版

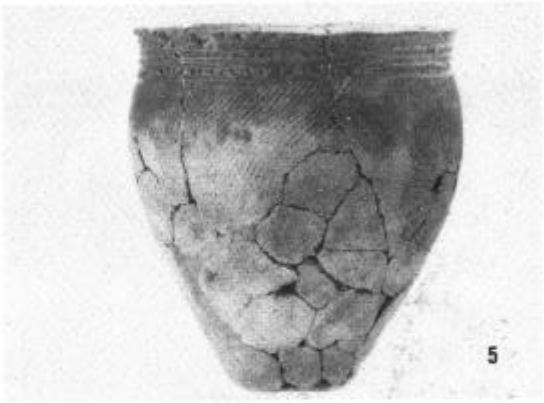
SK14・15

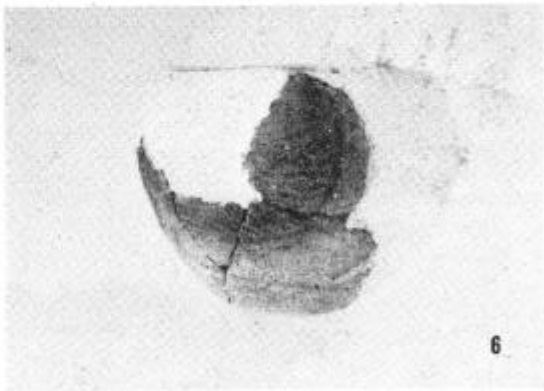
SR04

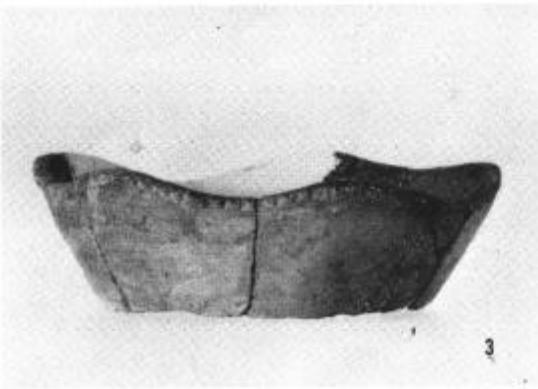
SR08

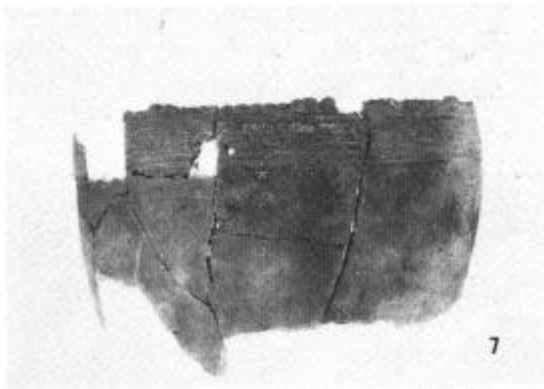






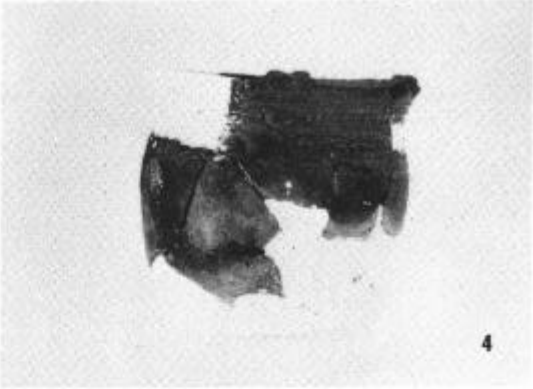


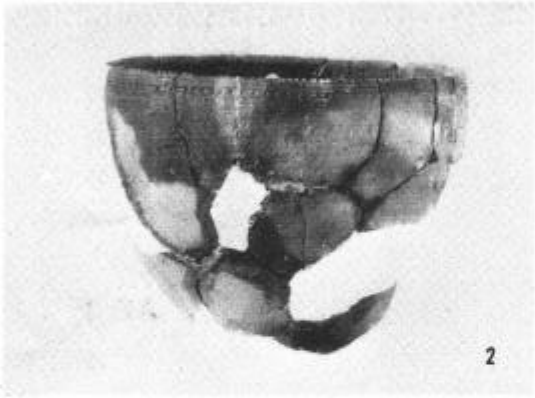


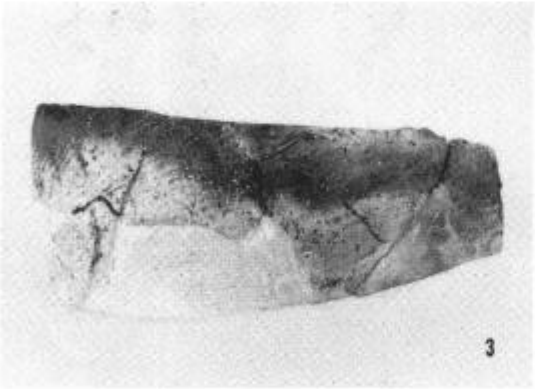


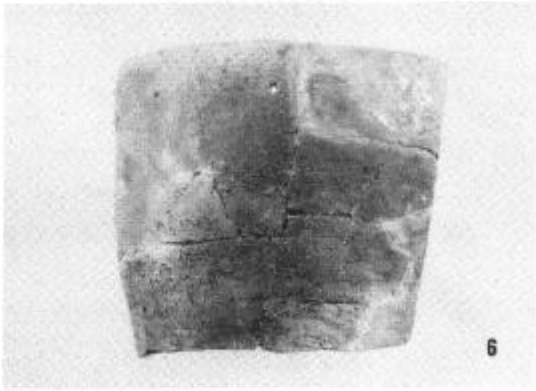
出土土器（1）　1，SR08　5，SK14
4，SR04　その他は遺構外

第八図版

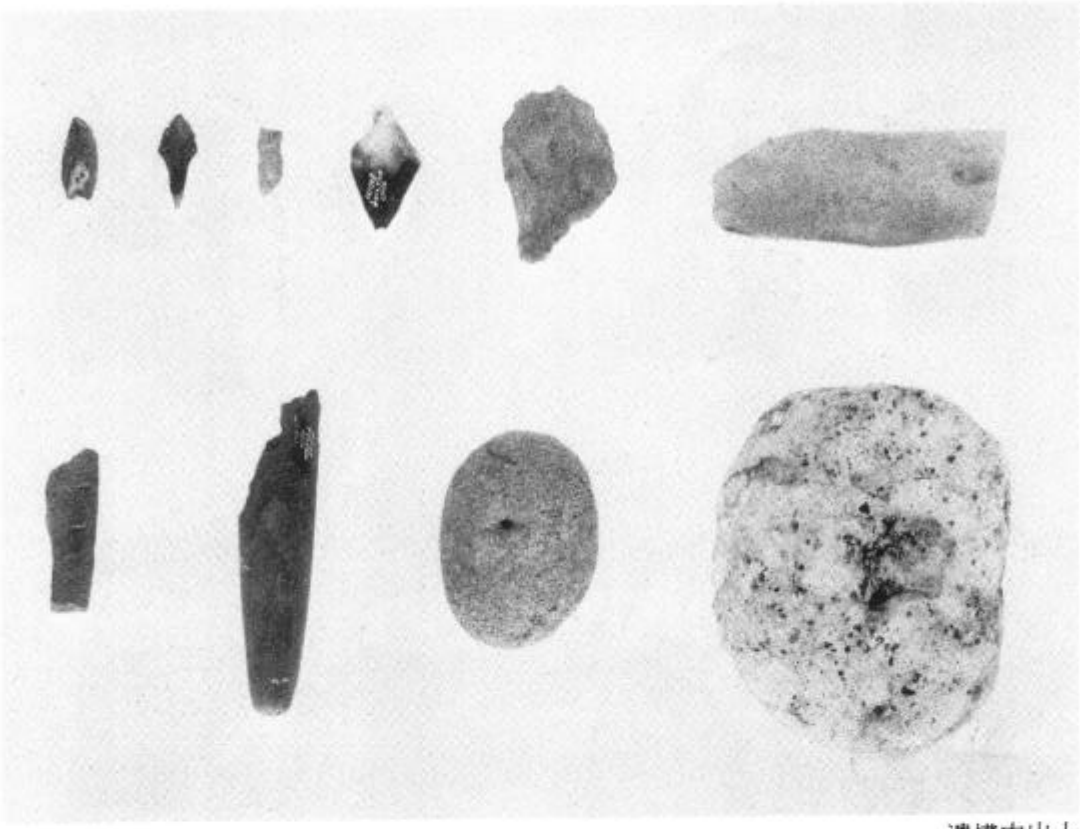




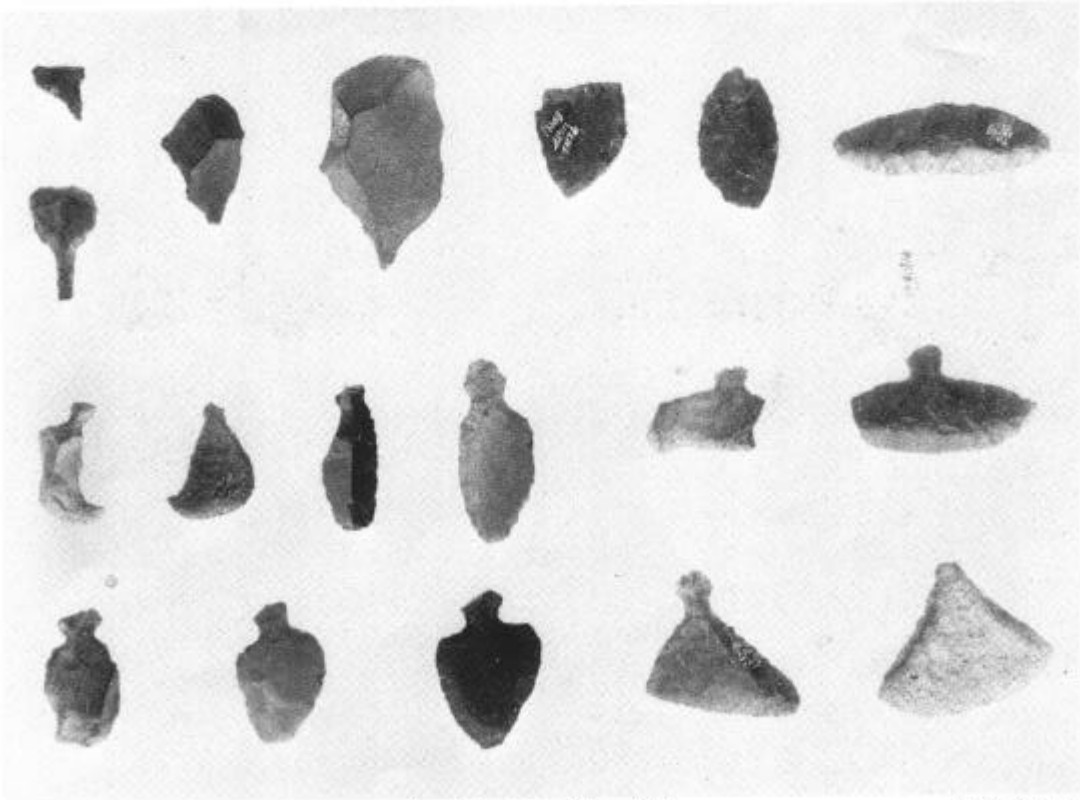




出 土 土 器 （2）　　いづれも遺構外



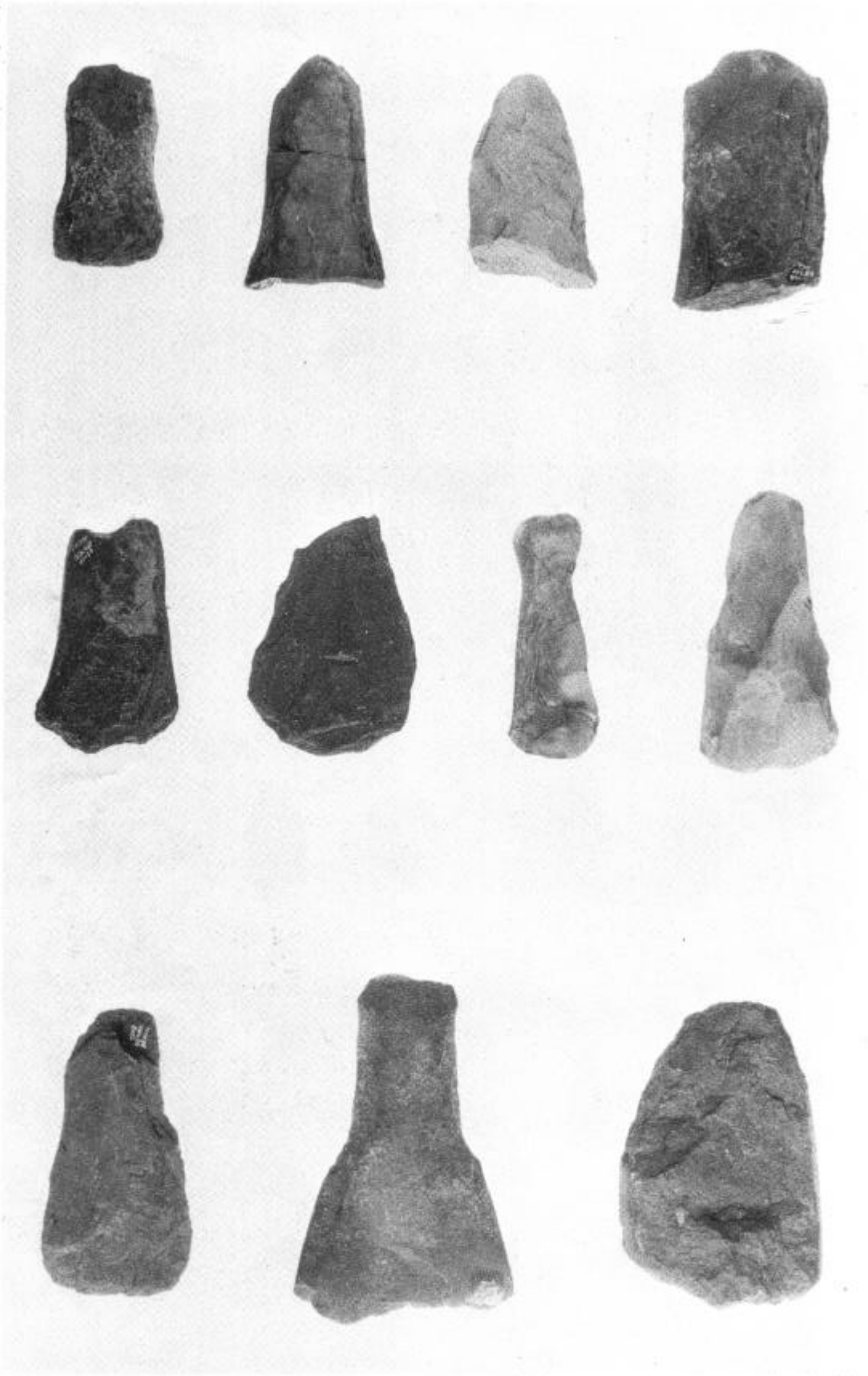
遺構内出土



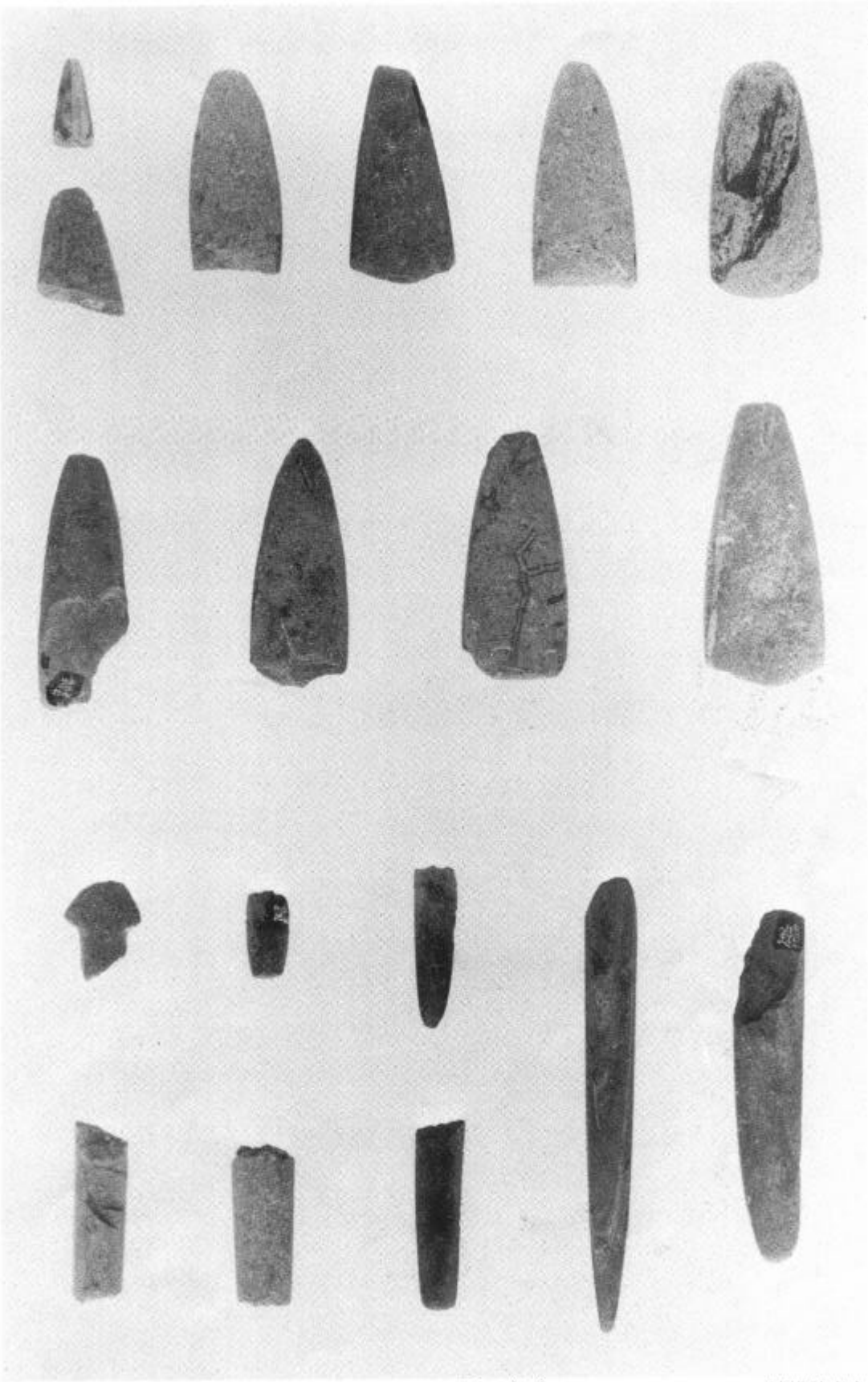
遺構外出土

出土石器（1）

第十図版



出土石器（2）　　遺構外出土



出土石器（3）　　遺構外出土